

東洋學藝雜誌第三十八號

蠶蛆ノ發育

第四回 佐々木忠二郎

大約春蠶ハ蛆ノ寄生ヲ受クルト特ニ甚シク概算スルニ百頭ノ蠶兒中其寄生ヲ受クルモノハ無慮八拾頭ノ多キニ居ル然レモ夏蠶ノ之ヲ寄生スルモノハ百頭中四拾頭又々秋蠶ノ之ヲ寄生スルモノハ百頭中一二頭ニ過キザルナリ此ニ因テ之ヲ見レバ夏蠶ハ蛆害ヲ受クルト春蠶ヨリ尠ク秋蠶ハ又々夏蠶ヨリ尠ホ一層尠キヲ識ルベシ然ル所謂ノモノハ蓋シ理ナキニ非ザルナリ凡ソ夏蠶ハ七月中旬頃ニ產生スルモノニシテ之ニ與フルニ春蠶ヲ飼養セシ桑葉ノ殘餘即チ五月中ニ萌出シタルモノヲ以テスルモハ蛆ヲ寄生ス是レ桑葉ニ卵子ヲ附着セルガ故ナリ其之ヲ寄生スル夏蠶ノ數春蠶ノ半ハニ過キザルハ蓋シ桑葉ニ附着セル卵子ハ產下セル後久シク旱天ニ晒サル、ガ爲メニ枯死スルモノアルニ因ルナリ又々夏蠶ニ五月中ニ萌出シタル桑葉ト六月以來萌出シタルモノトヲ取雜ヘテ與フレハ蛆ヲ寄生スルトハ前ノモノヨリ一層尠シト雖モ之ガ寄生ヲ免ル、

トハ決シテ有ラサルナリ又々夏蠶ニ與フルニ六月以來萌出シタル桑葉ノミヲ以テスレバ更ニ蛆ヲ寄生セサルナリ又々秋蠶ハ大約八月上旬ニ產生スルモノニシテ適々之ニ五月中萌出シタル桑葉ヲ與フレバ蛆ヲ寄生スハシト雖モ其五月中ニ萌出シタル桑葉ハ假令ヒ卵子ヲ附着スルモ六月ノ兩月間炎天ニ晒サレテ過半ハ之ガ爲メニ枯死シ其生力アルモノハ僅々ナルヲ以テ夏蠶ヨリモ之ヲ寄生スルト尠キナリ故ニ秋蠶ニ與フルニ六月以來萌出シタル桑葉ヲ以テスルモハ蛆害ヲ受クルトナシト云フモ不可ナカルベシ之ニ依テ見レバ春蠶ハ蛆ヲ寄生スルト尠ク夏蠶秋蠶ハ之ヲ寄生スルモ僅少ナルガ故ニ專ラ夏蠶秋蠶ヲ飼養スルト利益アルニ似タレモ反ツテ不利ナルト萬々ナリ何トナレハ夏蠶秋蠶ハ春蠶ヨリ稍ヤ疲弱ニシテ繭モ亦稀薄ナリ加之五月中萌出シタル桑葉ハ蠅卵ヲ附着スルモノトシ六月以來萌出シタル桑葉ハ蛆ヲ寄生セザルモノトスルノ幸アルモ桑樹ハ其勢力ヲ失シ翌春ニ至リテハ善良ノ葉芽ヲ萌出スルト能ハサルノミナラズ蠅ノ産卵スルニ倔強ノ場所トナルモノナレバ猶ホ桑樹ヲシテ其勢力ヲ盛ンナラ

會天開々吉田福壽君伊藤ト理學ト關係ト言々ト云々是ニテ演說アリ本月二十日又例場ニ於テ開會アリ加藤弘之

辨也作蠶瘴說。

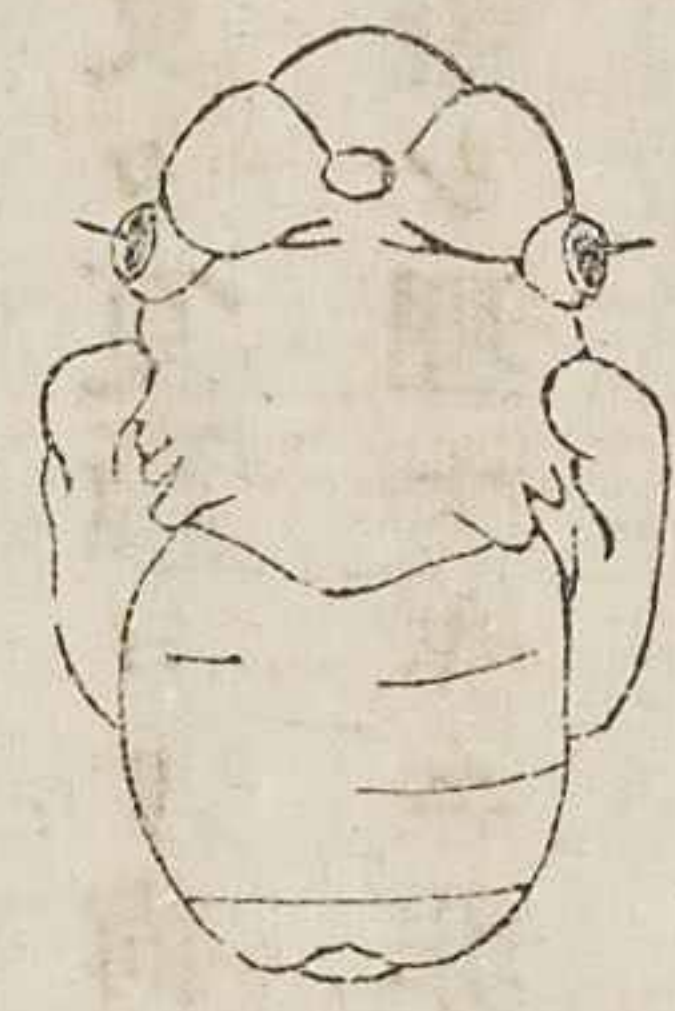


シメ蠅ヲシテ之ニ産卵セシメサル術ヲ考究シ春蠶ヲノミ飼育スルコトニ勉強シ夏蠶秋蠶ヲハ可成飼育セサルコソ肝要ノコト云フベケレ

抑モ蛆ハ黒蛹トナリタル時其皮膚ハ變シテ蛹殼トナリ内容ハ化シテ白色ノ汁液トナリ更ニ何等ノ構造ヲ存スルコトナシ然レモ一週日ヲ經テ之ヲ剖見スレバ已ニ淡黄色ノ幼

蠅(第八圖)之ニ存在ス其形ヲ橢圓ニシテ頭胸腹ノ三部ニ

第八圖



分レ頭部ハ三角形ニシテ頭上ニ

ハ三個ノ腫起物アリ即チ其左右

ニ存ズル腫起物ハ複眼ニシテ其

間ニ存ズル一個ノ小凸起ハ單眼

ナリ又頭部ノ前縁ニ二個ノ小凸

起ヲ存ズルモノハ觸角ニシテ頭

部ノ腹面ニハ不完全ノ口具ヲ生ズ胸部ハ方形ニシテ其左

右ニ存スル一個ノ長囊ハ翅ナリ翅根ヨリ尠ク下リテ存ズ

ル細長凸起ハ不完全ノ翅ニシテ權衡棍ツリアイボウトナルモノナリ又

タ胸部ノ腹面ニハ三對ノ短キ脚ヲ存シ胸部ノ前縁ノ兩隅

ヨリハ一個ノ獨樂様ノ器具ヲ存シタリ又々四週日ヲ遇キ

第九圖



黒蛹ヲ剖見スレバ体軀褐色ヲ呈シ複眼ハ赭色ヲ呈シ胸部

腹部及ヒ頭部複眼ノ間ニハ僅少ノ粗毛ヲ生シタリ翅脚モ

亦タ尠ク伸長シテ胸部ニ存スル獨樂様ノ器具モ殆ント全

成セルガ如シ此器具ハ漏斗形ノ膜質管ヨリ成テ其細端ハ

胸部ノ氣門ニ接シ其遊離端ニハ褐色ノ革質板アリテ中央

ニ一細長管ヲ吃立シ黒殼ニ開ケル小孔ヨリ殼外ニ挺出ス

(第九圖)但シ此細長管ト漏斗形管トニハ細溝ノ穿テルア

リテ之ヨリ大氣ヲ通シ之ヲ胸部ニ開ケル氣門ニ送入スル

コ明カナリ一幼蠅ハ其后チ漸々黒色ヲ帯ビ粗毛モ從テ増

加シ諸器全備スルト雖モ尙ホ蛹殼内ニ蟄シテ動クコトナク

依然トシテ冬日ヲ經過シ翌春四月ノ候ニ及ンテ初メテ完

全ノ蠅ト爲リ土中ヨリ這出スルモノナリ

幼蠅ハ土中ニ於テ蛹殼ヲ毀テ之ヲ辭シ出デ從テ土上ニ這

出スルハ如何シテ然ルヤヲ見ルニ頗ル奇狀ヲ呈スルモノ

ナリ蓋シ其幼蠅ノ蛹殼ヲ辭シ出テントスルヤ複眼ノ間タ

ニ存ズル部分ハ伸長シテ小囊ノ狀ヲ爲シ之ニテ蛹殼ヲ内

ヨリ壓シテ之ヲ毀ツナリ此小囊ハ空氣ニテ充塞セルモノ

ナレバ空氣ヲ出入スルニ從テ小囊モ亦タ縮張ス而シテ幼

蠅ノ蛹殼ヲ辭シ出ヅルキ直ニ頭部ヲ上ニ向ケ小囊ヲ脹ラ

ヲシテ其論理ノ一目瞭然タルニ感服セシム當時楊墨ノ勢

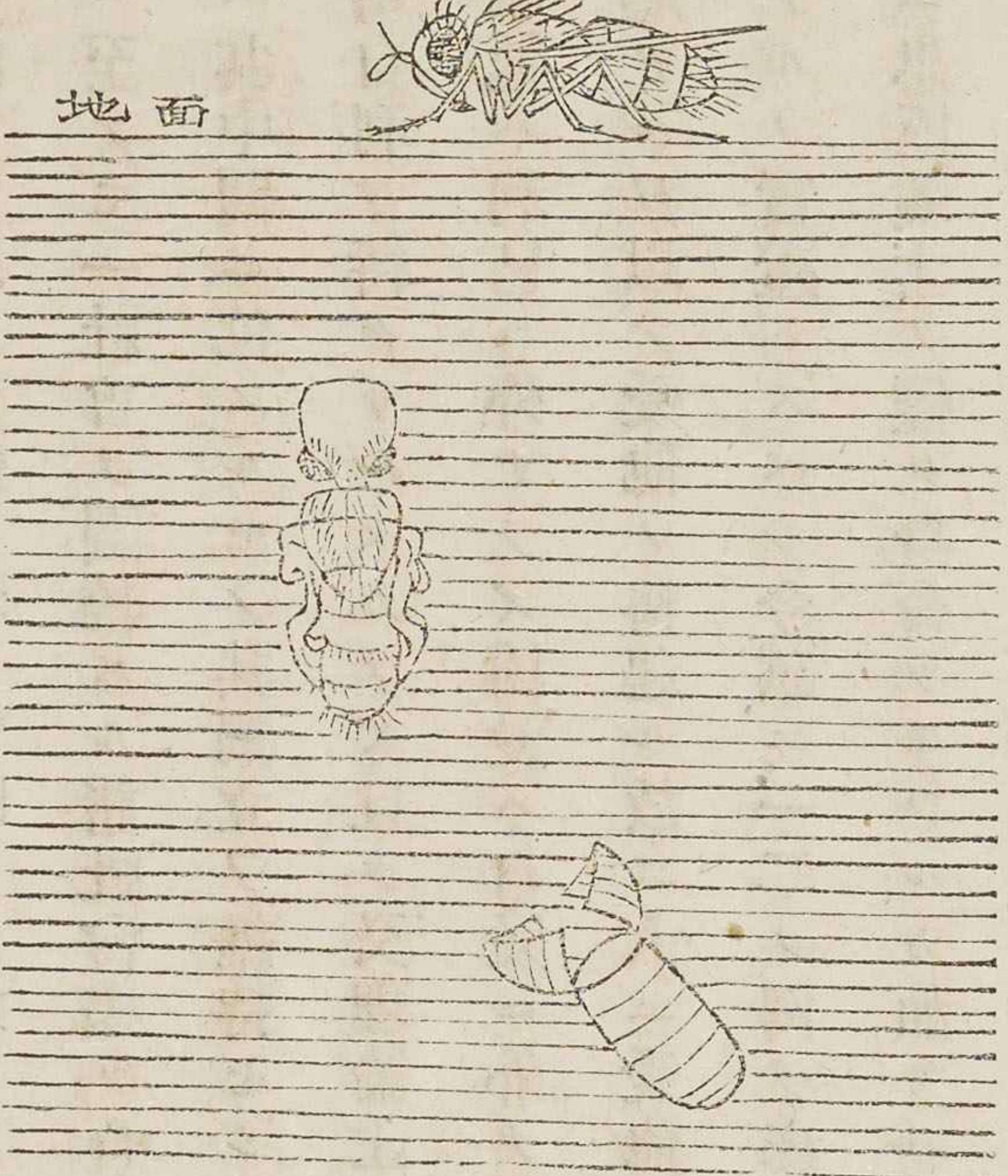


ヨリハ一個ノ獨樂様ノ器具ヲ存シタリ又々四週日ヲ遇キ

ナレバ空氣ヲ出入スルニ從テ小囊モ亦々縮張ス而シテ幼

蠅ノ蛹殼ヲ辭シ出ヅルキ直ニ頭部ヲ上ニ向ケ小囊ヲ脹ラシテ體軀ヲ渺ク崇メ又々之ヲ收縮シ續キテ之ヲ擴張シ以テ體軀ヲ登シ交々之ヲ縮張シテ土上ニ現出スルナリ（第十圖）

第十圖



其土中ヨリ初メテ現出シタル時ハ翅ハ尙ホ開張セザルヲ以テ容易ニ飛行スル

能ハザルモ

脚ニテ徐ニ匍

行シ常ニ日陰

ヲ選ミテ此處

ニ至リ靜息ス

ルヲ三十分許ニシテ體軀ニハ黑色ヲ加ヘ翅モ開張ス此時

ニ至レバ之ヲ鼓翼スルヲ數回ニシテ后チ空氣中ニ飛翔シ

桑葉ニ産卵シ以テ蚕兒ニ慘毒ヲ與フルモノナリ

○ 孟子論法ヲ知ラス 井上圓了

第一段○儒書中論理ヲ以テ考フベキモノ獨リ孟子アルノミ孟子ハ英才達辯巧ニ比喻ヲ設ケ自在ニ議論ヲ左右シ人

ヲシテ其論理ノ一目瞭然タルニ感服セシム當時楊墨ノ勢猛ナルモ氏ノ論鋒ノ銳利ナル一撃ノ下ニ能ク之ヲ挫滅スルニ至ル是レ蓋シ氏ノ後ニ亞聖ノ稱ヲ得タル所以ナラン然レモ之ヲ孔子ニ比スルニ二氏ノ間霄壤ノ懸隔アルヲミル孔子ニ於テハ別ニ驚クベキ所ナク又怪ムベキ所ナシト雖モ孟子ニ至テハ稱嘆スベキ点多ク又非難スベキ点多シ今爰ニ獨リ其非難スベキ点ヲアゲテ一々之ヲ痛責討究セントス其意敢テ孟子ヲ排斥スルニアラズ其非ヲ矯メ其過ヲ正シ其論ヲシテ萬世不易ノ名論トナシ其書ヲシテ完全無瑕ノ良書ト爲ント欲スル微衷ノミ讀者幸ニ之ヲ諒セヨ第二段○孟子ノ論理ノ不正ナルハ要スルニ一ハ辯才ヲ以テ真理ヲ左右シ一ハ比喻ヲ設ケテ理非ヲ混同スルニアリ今其篇ニツイテ一々之ヲ考フルニ梁惠王篇ノ首章ニ利ト仁義トヲ比較シテ論シタル一問答アリ王ハ問フニ利ノ一事ヲ以テス孟子ハ答フルニ仁義ノ二字ヲ以テス而シテ孟子ノ利ノ國家ニ害アル所以及ヒ仁義ノ益アル所以ヲ説クカ如キ唯二者ノ極点ヲ擧ケテ論スルノミ固ヨリ至當ノ理ニハアラズ利中ノ惡ノ大ナルモノト仁義中ノ益ノ大ナル



モノトヲ較スレハ五尺ノ童子モ能ク其利害得失ヲ判スベシト雖モ世間ノ事タル一利一害ハ勢ノ止ム能ハザル所ニシテ利ハ惡ナリト云フモ時ニヨリテハ善トナルコトアリ仁義ハ善ナリト云フモ世ニヨリテハ害トナルコトアリ例ヘハ自愛ヲ利トシ愛他ヲ仁トセンカ社會未タ全ク團結セサルノ時ニ當リテハ自愛自利ニアラザレハ一生ヲ世間ニ保全スル能ハス即チ自愛自利ハ當時ノ人道ナリ又社會團結ノ日ニ至テモ一社會ヲ圍繞スル諸社會盡ク自利ヲ本トスルキハ其中間ニ位スルモノ其獨立ヲ維持セント欲セバ自然ノ勢自利ヲ待タザルベカラズ且ツ又理論上ヨリ之ヲ觀レハ利他ハ利己ニ外ナラズ博愛ハ自愛ニ外ナラス人皆自愛ノ心アルヲ以テ愛他ノ情起ル故二人ニ愛他心アルハ自愛心アルノ實證トスベシ今試ニ一二ノ例ヲ舉ゲテ之ヲ證スルニ忠臣義士ノ輕ク身命ヲスツルカ如キハ全ク愛他心ニ出ツルモノトナスベキカ曰ク否芳名ヲ千歳ノ後ニ傳ヘント欲スル自愛心アルニ由ル孺子ノ井ニ陷ントスルヲ見テ惻隱ノ心ノ生スルカ如キハ獨リ愛他心ト稱スベキカ曰ク否是レ自身多年ノ經驗上ヨリ來ル一結果ニシテ其實自愛

心ニ外ナラズ何者自ラ先キニ己ニ井ニ陷ルノ苦ヲ腦裏ニ記スヲ以テ他人ノ其危難ニ觸ル、モノアルヲ見レハ忽チ其苦痛ヲ想起シテ殆ント堪フベカラサルニ至ル於是其人ヲ救助スルナリ若シ又之レニ反シ此ノ如キ愛他心ハ各人本來有スルモノニシテ經驗ヨリ來ルニアラスト云ハ、二三歳ノ小兒モ之ヲ見テ心ヲ動カスヘキハ當然ノ理ナリ然ルニ其心ヲ動カスコトナキハ愛他心ハ經驗ヨリ來ルノ一證トナスニ足ル之ヲ要スルニ愛他ト自愛トハ互ニ相關接シ獨リ一ヲ取リテ他ヲ廢スベカラス而シテ二者中一主義ヲ立ツルハ唯其時ノ事情ニ應ジテ先後本末ヲ定ムルノミ自愛主義ヲ唱フルハ自愛ヲ以テ先トスルナリ愛他主義ヲ唱フルハ愛他ヲ以テ本トスルナリ然ルニ孟子ノ一論ノ如キハ全ク此關係ヲ知ラサルニ似タリ自愛ハ其所謂利ナリ愛他ハ其所謂仁義ナリ孟子ハ仁義ト利トハ全ク相反對スルモノニシテ毫モ相關係スル所ナシト信スルカ如シ而シテ其二者ノ利害ヲ較スルニ利ノ弊ノ大ナルモノヲ舉ゲテ上下交征利國危矣ト云ヒ或ハ萬取千焉千取百焉不爲不多矣ト云ヒ或ハ又苟爲後義而先利不奪不饜ト云ヒテ天下ノ害

利ヨリ甚キモノナキカ如ク論セリ是レ一辯論ト謂ハザル

維持スルコト能ハザレハ必然ナリ然レモ獨リ利ノミヲ用ヒ



否是レ自身多年ノ經驗上ヨリ來ル一結果ニシテ其實自愛

ト云ヒ或ハ又苟爲後義而先利不奪不饜ト云ヒテ天下ノ害

利ヨリ甚キモノナキカ如ク論セリ是レ一僻論ト謂ハザル  
 ベカラズ若シ果シテ孟子ノ謂フ所ノ如クシハ王一人利ヲ  
 好メハ上下一時ニ危ク國家半日モ亂ナキ能ハズ王若シ之  
 ニ反シテ仁義ヲ好メハ天下立ロニ平治スベキ理ナレモ其  
 言甚タ信シ難シ夫レ孟子ノ時ニ方リテハ唐虞三代ノ政教  
 世ニ傳ラサル年已ニ久シ上下皆自愛自利ヲ本トシ連衡是  
 レ務メ攻伐以テ賢トナス久習積俗ノ餘豈一人ノ力一朝一  
 夕ニ能ク之ヲ變更センヤ縱令明君ノ此際ニ出ツルアリテ  
 仁政ヲ民ニ施スモ天下ノ民沛然トシテ時雨ノ下ルカ如ク  
 之ニ服歸セザルヤ疑ヲ容レス焉ソ能ク之ヲ湯武ノ時ト同  
 日ニ論スベケンヤ且ツ戰國ノ多事ニ際シテハ仁政ヲ施ス  
 ニ暇ナキヲ如何セン當時各國ノ勢四隣皆敵ニシテ常ニ其  
 隙ヲ窺フテ之ヲ併呑セントス縱ヒ我レ兵爭ヲステ、仁義  
 ヲ行ハント欲スルモ人干戈ヲ以テ前後ニ迫ルキハ何ヲ以  
 テ之ニ對スベキヤ我レ兵ヲ以テ之ニ抗セザレハ人ノ爲メ  
 ニ擊殺セラレンノミ果シテ然ラハ仁義ハ良策良法ナルモ  
 兵爭多端ノ日ニ際シテハ一時ニ之ヲ行フ甚難シ其勢利ヲ  
 先トセザルベカラス利ニアラズンハ一國朝夕ノ獨立スラ

維持スルヲ能ハザルハ必然ナリ然レモ獨リ利ノミヲ用ヒ  
 テ全ク仁義ヲ用ビザルモ亦害アリ故ニ余以爲ラク利ヲ節  
 スルニ仁義ヲ以テシ仁義ニ和スルニ利ヲ以テスヘシ能ク  
 此二者ヲ折衷調和シテ其時ノ事情ニ適セシムルモノ即チ  
 王者ナリ君子ナリ之ヲ要スルニ孟子ノ論理ノ不當ナルハ  
 利ト仁義トノ關係ヲ論セズ唯利ノ大害アル點ト仁義ノ大  
 益アル點トヲ擧ゲテ之ヲ是非シ更ニ利ノ益アル所以仁義  
 ノ弊アル所以ヲ説カス而シテ王亦曰仁義而已矣何必曰利  
 ト論決シタルニアリ凡ソ事物其種類ヲ問ハス純良純善有  
 功無害ナルハナク又唯惡無善ナルハナシ故ニ二者中善中  
 ノ惡ト惡中ノ善トヲアケテ比較スレハ善者却テ惡トナリ  
 惡者却テ善トナルコトアリ例ヘハ野蠻人ハ愚ニシテ開明ノ  
 民ハ賢ナリトス然レモ野蠻人中ノ最モ智アルモノト開明  
 人中ノ最モ愚ナルモノトヲ較スレハ開明人却テ野蠻人ニ  
 如カザルコトアリ盜賊ハ社會ヲ害スルモノニシテ醫士ハ社  
 會ヲ利スルモノトス然レモ盜賊中ノ仁心アルモノト醫士  
 中ノ不仁心ノモノトヲ較スレハ醫士却テ盜賊ニ如カザル  
 コトアリ故ニ事物ノ利害善惡ヲ判決スルニハ先ツ其二者ノ



利害多少ヲ考定シテ論理ノ權衡ヲ失セザルヲ肝要トス之ヲ失スレハ如何ナル名論ト云フモ僻說ト定メザルベカラス今孟子ノ仁義ヲ論スルカ如キハ仁義ヲ以テ純善無惡萬世不變ト斷定シテ天下國家ヲ治ムルノ法仁義ヨリ外ナキヲ主唱スルヲ以テ一局ニ偏シタル論ト謂フモ豈不可ナラシヤ因ニ云フ儒書ニ用フル利ノ一字ハ汎意虛偽ノ過失ニ觸ル、ト往々之レアリ梁ノ惠王ハ孟子ニ向ヒテ何ヲ以テ吾國ヲ利セント欲スト曰ハレタルニ孟子之ニ對ヘテ亦仁義アルノミ何ソ必ス利ヲ曰ハント言ヒタル一問答ニツイテ直チニ之ヲ考フレハ仁義ハ國家ヲ利スルモノニアラス仁義ハ國家ヲ害スルモノナリト云フノ意アルカ如シ然レハ其實此利ナルモノ私利小利ノ利ニシテ公利ノ利ニアラズ公利上之ヲ論スレハ仁義ハ固ヨリ國家ヲ利スルモノナリ故ニ利ノ一字ニハ公私善惡ノ二義ヲ含有スト知ルベシ今假リニ一例ヲ設ケテ其證ヲアグルニ

愛國者ハ國家ノ爲メニ利ヲ計ルモノナリ(第一提案)  
然ルニ利ハ惡ナリ(第二提案)  
故ニ愛國者ハ國家ノ爲メニ惡ヲ計ルモノナリ(斷言)

此推論式ハ所謂汎意虛偽ノ過失ニ觸ル、モノナリ何者第一提案中ニ舉クル所ノ利ト第二提案中ノ利ト全ク其意義ヲ異ニスレハナリ故ニ汎意虛偽ハ論法家ノ注意ヲ要スル所ナリ

第三段○梁惠王鴻雁麋鹿ヲ顧テ賢者亦樂此乎ト孟子ニ問ヒタルニ孟子之ニ對ヘテ賢者而後樂此不賢者雖有此不樂也ト曰ヘリ孟子ノ言理ナキニアラスト雖モ假定モ亦甚シト謂ハザルベカラズ何者孟子ノ論スル所ニ從ヘハ古來賢者盡ク之ヲ樂ミ不賢者ハ一人モ之ヲ樂ムモノナシト斷言スルカ如シ而シテ其證ヲ舉クルニ殷湯周文二王ヲ以テス何ソ知ラン世間賢者ニシテツヒニ之ヲ樂マズ不賢者ニシテ終生能ク之ヲ樂ムモノアルヲ焉ソ二王ノ爲ス所チミテ天下萬世ヲ例スルコトヲ得シヤ且ツ古代人民ノ寡少ナルニアタリテハ百般ノ事君民偕ニ樂ムコトヲ得ベシト雖モ政府ノ多事人民ノ衆多ナル時ニ至テハ偕ニ樂マント欲スルモ或ハ恐ル爲シ能ハザルヲ孟子ハ戰國ノ末世ニ出テ三代ノ時ヲ距ル千百餘歲時勢人情ノ變遷固ヨリ一日ニアラス獨リ政法治道ニ至テ一轍ヲ固守スルノ理アラシヤ故ニ孟子

ノ政治ヲ談スル必ス例ヲ堯舜三代ノ時ニ徵シ徹頭徹尾其

ヲ觀シ者、今日新富座ニ太閤ニ逢フコト亦難キニアラズ。



ノ政治ヲ談スル必ス例ヲ堯舜三代ノ時ニ徴シ徹頭徹尾其風ヲ摸倣セントスルハ亦僻論ト謂フベシ (未完)

元史中ニ散見スル所ノ「マルコ、ポロ」ノ事蹟及其傳

三 宅 米 吉

「マルコ、ポロ」ノ名ハ歐洲ニテハ數百年前ヨリ誰知ラヌ者ナシ、我國ニテモ數十年前ヨリ學者ノ知ル所ナリ。抑モ此人ハ歐洲人中始メテ亞細亞大陸ヲ橫斷リテ蒙古支那ニ至リ其風土人情等ヲ見聞シタルモノニシテ、我日本國ノ在ルアルヲ歐洲人ノ始メテ知リタルモ此人ヨリ傳聞キタルナリ。其旅行ノ記ハ歸歐ノ後世ニ出タセシガ、歐洲各國人爭テ之ヲ購讀シタリト云フ。蓋シ當時彼ノ天下ヲ席卷シテ屢歐洲人ノ膽ヲ寒サシメタル蒙古大汗鎮木真カ死シテ猶其肉ノ未タ冷ヘサリシ時ナレハ、此紀行ノ廣ク流布セシモ宜ナリ。星移リ物換リ歐洲ニ於テ封建ノ勢衰ヘ、航海商業ノ道大ニ開ケ、漁船萬里ノ波濤ヲ凌キ、電線鑛路山嶽河湖ヲ橫斷スルノ今日ニ至リテハ、地球上又交通セサル所ナク、今日梵香堤上ニ花ヲ賞スル者、明日龍動橋上ニ月ヲ咏メ、昨日「オペラ」フランスニ「ナボレオン」

ヲ觀シ者、今日新富座ニ太閤ニ逢フコト亦難キニアラズ。ソレスノ如キ世界ニ生レテカノ「マルコ、ポロ」ガ當時山川ヲ跋涉シテ萬里ノ旅程ヲ凌キ、歸リ來リテ其見聞シタル所ヲ録シ、以テ上ハ王侯貴人ヨリ下農商ノ徒ニ至ルマデ、或ハ驚カシメ、或ハ怪マシメ、世界ノ外又世界アリト思ハシメタルノ往時ヲ追想スレハ、世態ノ變遷亦甚少クナラサルヲ知ルヘシ。我國人が始メテ「マルコ、ポロ」ニ就テ聞キタルハ蓋シ歐洲人ヨリ傳聞シタルナラン。(伴信友ガ中外經緯傳ニ「長崎なる紅毛ノ通事志筑忠雄ガ西洋の國のゼルマニヤといふ國人ケレブルといふガ紅毛に住着て元録のころ皇國小參渡り來りて歸りて後皇國の事どもを記せる書と得て翻譯して書ととのへたる瑣國論といふ書に 中略 勿擄發亞國のマルキユス、ポーリユスと云へるもの建治元年に當れる年鞆鞆ニ往てキユブライといへる王に仕へその王の支那と併する時に遇ひ隨て支那ヨリ行て前後十七年の間や、重く用ひられ」云々トアルガ我國人ノ「マルコ、ポロ」ヲ知リシ始メナラン)支那人ト雖モ亦然ラン而ルニ何ソ知ラン、



彼レ元ノ世祖忽必烈<sup>クブライ</sup>ニ仕ヘテ高官ニ昇リ屢功勞アリシコトノ嚴然タル支那國史ニ登載セラレ、ヲ。今左ニ元史中ポロニ係ル所ノ諸項ヲ摘出セン。元史類編卷二 至元七年ノ條ニ曰ク十二月丙申、朔改立大司農司、增巡行勸農使、副各四員、命御史中丞、李羅、兼大司農卿、以都水監隸之、

同十二年四月ノ條ニ曰ク丁卯命李羅、爲御司大夫、罷隨路巡行農官、以按察司、兼勸農事

同十四年二月ノ條ニ曰ク命李羅、爲樞密副使兼宣徽使領侍儀司事、

同阿合馬ノ傳ニ曰ク前略帝聞之、震怒、即命司徒和禮霍孫、樞密副使李羅等馳詣大都、討亂者、獲高和尚於高粱河、與王著張易、並醢於市、著臨刑大呼、云々(中略)初阿合馬死、帝猶未察其姦、及徐詢李羅、始盡得其罪狀、怒曰、王著殺之、誠是也、命剖棺戮屍、縱犬啗其肉、

「ポロ」ハ屢忽必烈ノ命ヲ奉シテ諸州ニ巡行シ風土人情ヲ觀察セルコト其紀行ニ詳カナリ。又阿合馬ノ亂ニ就テハ特ニ其紀行中一章ヲ設ケテ、忽必烈ノ上都ニ行幸セシ

ヨリ、犬ヲ縱テ阿合馬ノ屍ヲ啗ハシメタルマデ詳説セリ。コレヲ以テ見レハ右ニ摘出シタル李羅ナル者ハ即チ「マルコ、ポロ」タルコト決タル如シ。李羅ハ支那音ニテポロナリ。

コレヲ外支那史中ニ李羅カ事蹟ノ記載アルメレド、余ノ淺識寡聞之ヲ知ルナシ。「ポロ」ハ其紀行ニ據レハ忽必烈ノ殊遇ヲ受ケ高官ニ昇リ常ニ宮中ニ伺候セシモノ、如シ。カホト忽必烈ノ寵ヲ蒙リ一時名ヲ朝廷ニ得タルニ

モ拘ハラズ、元史列傳中ニ其傳ナキハ甚タ怪シムヘシ(李羅帖木兒等アレ<sup>レ</sup>時)ト雖<sup>レ</sup>、蓋シ彼ハ一時流寓ノ人ニ代<sup>レ</sup>モ人物モ甚タ異ナリ

シテ其子孫ノ此ニ止マルモノナカリシヲ以テ其詳細ノ傳ハ傳ハラサルヘシ。且ツ元史欠缺スル所多ケレバ其事蹟ノ中途ニシテ失ハレタルニテモアルヘキカ。世ノ博學ノ士猶李羅カ事蹟ニ就テ支那史中ニ見ル所アラバ請フ示教ヲ垂レヨ

「マルコ、ポロ」ハ伊太利「ベニス」ノ人ナリ。其家系詳カナラズ。伯父ヲ「アンデレヤ、ポロ」ト云ヘリ。當時「ポロ」家「ゼレシヤ」「ヘリス」ノ二派ニ分レタリシガ「ア

ンデレヤ、ハ乃チ其「ヘリス」ノ「ポロ」家ナリキ。「ア」ヲ奉シテ歐洲ニ歸ルコトヲ得タリ。然ルニ當時前ノ法



ハ特ニ其紀行中一章ヲ設ケテ、忽必烈ノ上都ニ行幸セシ

「ポロ」家「ゼレシヤ」「ヘリス」ノ二派ニ分レタリシガ「ア

ンデレヤ」ハ乃チ其「ヘリス」「ポロ」家ナリキ。「アン  
 デレヤ」三子アリキ曰ク「マルコ」曰ク「ニコロ」曰ク「マ  
 フェオ」。

此三子商業ニ從事シ長子「マルコ」ロコンスタ  
 ンチノ「プル」(當時羅馬東  
 帝國ノ首府)ニ出店ヲ有シ又「クリミヤ」  
 半島ニモモ一店ヲ置キタリシカ如シ。二子「ニコロ」  
 三子「マフェオ」モ屢商業ノ爲メ彼此ニ往來セリ。一千二百  
 六十年此二人「コンスタンチノプル」ヨリ「クリミヤ」ニ  
 往キ、ソレヨリ猶商業ノ都合ニヨリテキブチャツク欽察國(成吉思汗長  
 西亞南部ニ)ノ都薩來サライニ到リ、戰亂ニ逢テ皈ルコトヲ得ス  
 シテ、路ヲ轉シテ南「ウカカ」ニ出テ「ボルカ」河ヲ渡リ沙  
 原ヲ越テトボカラ哈兒ハハニ到レリ。此ヨリ又進ム能ハズ、進退谷  
 ヲテ三年間此地ニ逗留セリ。偶マ西域波斯三旭烈兀ホレタ忽  
 必烈ノ使節ヲ蒙古大帝忽必烈ノ朝ニ遣ハスニ遇ヒ、之ニ附  
 シテ蒙古ニ到レリ。忽必烈未ダ曾テ歐洲人ヲ見シコト  
 ナカリシヲ以テ渥ク「ポロ」兄弟ヲ遇シ、巨細西歐ノ事情  
 ヲ尋問セリ。其羅馬法王ノ事ニ及デ大ニ感シタル如シ  
 即チ「ポロ」兄弟ヲ使節トシテ法王ニ耶蘇教ノ僧侶數百名  
 ヲ送ラレンコトヲ請ハシメタリ。於是「ポロ」兄弟其命

ヲ奉シテ歐洲ニ歸ルコトヲ得タリ。然ルニ當時前ノ法  
 王既ニ死シテ其後嗣未ダ定マラザリシカハ、其后ヲ果タ  
 ス能ハサリキ。依テ兄弟ハ先ツ故郷「ベニース」ニ皈リ  
 新法王ノ定マルヲ待ントセリ。古郷ニ歸ヘレハ「ニコ  
 ロ」ノ妻既ニ死シ子「マルコ」ヲ殘セルノミ。マルコ此時  
 既ニ二十五歳是即チ此傳ノ主タル「マルコ、ポロ」ナリ。  
 法王ノ繼嗣二年ニシテ猶定マラザリシカバ「ニコロ、マ  
 フェオ」一タビ忽必烈ノ朝ニ復命セントテ「マルコ」ヲ伴  
 ヒ、復ビ古郷ヲ立ち出テ小亞細亞ナル「アタル」府ニ至リ  
 使命ヲ果サマル由縁ヲ証セン爲メ、當時ノ高僧タリシ此  
 府ノ僧正「テオバルド」ノ手書ヲ請ヒ、又「セルサレム」ニ  
 至リテ耶蘇墳墓ノ燈明ノ油滴ヲ得テ、ソレヨリ「アヤス」  
 府ニ到レリ。時ニ法王ノ後嗣遂ニ定マリ、彼ノ「テオバ  
 ルド」其撰ニ當リテ法號ヲ「グレゴリー」十世ト云フト聞  
 コエケレバ、復ビ路ヲ反シテ「アクル」ニ至リテ漸ク使命  
 ヲ果タスヲ得タリ。然レトモ忽必烈カ請フ所ノ僧侶數  
 百名ハ之ヲ得ルコト能ハズシテ、纔カニ二名ヲ得テ之ヲ  
 伴ヒタレドモ此二名モ亦中途ニシテ前途ノ艱難ヲ恐レテ



販りに去レリ。「ポロ」三人ハコレヨリ報達ニ出テ「ホルム  
 ス」ヨリ海路ヲ取ラントセシモ、之ヲ得ズシテ陸路「ケル  
 マン」「コラサン」「パミル」「カスガル」「ヤルカンド」「コタ  
 ン」ヲ經テ唐兀<sup>タング</sup>ニ出テ遂ニ元都開平府ニ到着セリ。此行  
 前後凡ソ三ヶ年半ヲ費セリト云フ。忽必烈彼等ノ復ヒ  
 來レルヲ喜ビ、殊ニ少年「マルコ」ガ活潑ナルヲ愛シ、舊ニ  
 倍シテ寵遇セリ。「マルコ」此年既ニ二十一歳ナリシガ、  
 コレヨリ黽勉シテ蒙古領屬各地ノ言語ヲ學ビ、<sup>元朝ニ於テ用ヒタ</sup>  
 ル語ハ畏兀<sup>ウイグル</sup>蒙古支那契<sup>チベット</sup>次第ニ登用セラレ、屢諸州巡行ノ  
 命ヲ蒙レリ。「マルコ、ポロ」ガ始メテ使ヲ奉シタルハ山  
 西、陝西、四川、雲南、東郡西藏等ノ地方ヲ巡行シテ其風土  
 人情ヲ觀察セシコトナリ。 販朝ノ後、其復命ノ詳密ナ  
 ル、衆ニ超ヘシヲ以テ大ニ賞セラレタリ。 其後或時ハ楊  
 州路ニ三年間政ヲ執リ、又或時ハ叔父「マフエオ」ト與ニ唐  
 兀ナル甘肅府ニ一年間留マリ、又或時ハ蒙古々都哈刺和  
 林ニ行キ、又或時ハ占城<sup>チャンパン</sup>即交趾<sup>コウチン</sup>支那ニ行キ又或時ハ印度  
 ニモ行ケリ。 如此數十年間大汗ノ寵遇ヲ蒙リシカバ、名  
 ヲ揚ケ富ヲ得タルモ父モ叔父モ年既ニ老ヒテ頼リニ古郷

ニ還ランコトヲ欲セシカバ、屢々之ヲ忽必烈ニ請ヒシカ  
 ドモ忽必烈敢テ許サリキ。 偶マ忽必烈ノ姪「ペルシヤ」  
 汗「アルゴン」其後ヲ失ヒ使節ヲ以テ蒙古大帝ノ皇族ノ一  
 人ヲ后ニ迎ヘンコトヲ請ヘリ。 波斯ノ使節等「マルコ、  
 ポロ」ヲ見テ大ニ其博識ヲ喜ビ之ヲ波斯ニ伴ハントシ且  
 ツ燕京ヨリ波斯ノ「ダブリス」ニ到ルハ海路最モ便ナルニ、  
 蒙古人ハ皆海ニ馴レザシレカバ、皇女ノ送使タルベキ者  
 ハ「マルコ、ポロ」ヲ措キテ他ニアラサレバ「マルコ、ポロ」  
 波斯使節ノ助言ヲ得テ、旁皇女ノ送使トナリテ古郷ニ販  
 ランコトヲ切ニ請ヒ漸ク其許容ヲ得タリ。 是ニ於テ皇女  
 ノ送使トナリ、福建泉州ヨリ船出シテ、海上風波穩カナラ  
 サリシカバ波此ニ碇泊シテ一ヶ年有餘ニシテ、波斯ニ着  
 船セリ。 コレヨリ皇女「アルゴン」汗既ニ死シ弟「カイ  
 ン」ニ別レテ一千二百九十五年無事ニ古郷「ベニス」  
 ニ販着セリ。 家ヲ出テ、ヨリ既ニ二十年間ヲ經タリケ  
 レハ、其家ニハ親戚ノ者住居タルモ互ニ容貌ノ變リタル  
 ヲ以テ「ポロ」三人ハ他人ナリトシテ家ニ入ルヲ拒マレタ  
 リ。 ポロ等種々其經歷ヲ説キ且ツ其亞細亞ニ於テ獲タル

所ノ許多ノ珍寶ヲ見セケレバ漸ク其人タルヲ承知サレタ

メニ屢戰端ヲ開キシガ、未タ大戦ニ至ラズ



ヲ揚ケ富ヲ得タルモ父モ叔父モ年既ニ老ヒテ頼リニ古郷

リ。ポロ等種々其經歷ヲ説キ且ツ其亞細亞ニ於テ獲タル

所ノ許多ノ珍寶ヲ見セケレバ漸ク其人タルヲ承知サレタ  
リ。ユレヨリ「ポロ」ノ名「ベニース」ハモトヨリ、伊太利  
全國中ニ廣ガリ、東方ノ事情ヲ聽カントテ集マル者日ニ  
「ポロ」ガ門前ニ市ヲナセリ。

「ポロ」飯郷ノ後間モナク「ベニース」「ゼノア」ノ戰爭起レ  
リ。抑モ「ベニース」「ゼノア」「ピサ」ノ三府ハ當時地中  
海中商業ノ權ヲ握リ東亞西歐ノ富ヲ一所ニ聚メタリシ  
ガ、兩雄並立スル能ハズシテ常ニ互ニ相競ヒ相爭ヒ、第四  
回十字軍ノ時ニ當テ「ベニース」ガ「フランドル」侯「バル  
ド井ン」ヲ輔ケテ羅馬東帝國ヲ覆ヘシ「バルド井ン」ヲシ  
テ其帝位ニ登ラシメタルヨリ、「ベニース」ハ此帝國ノ庇  
陰保護ヲ受ケテ「ゼノア」「ピサ」ヲ抑ヘ、殆ンド東方通商  
ノ利ヲ專占セリ。是ニ於テ「ゼノア」「ベニース」ヲ怨ム  
コト益深カリシガ、「バルド井ン」ノ打立タル帝國勢漸  
ク衰ヘ前代ノ帝室「トレビゾンド」ニ潜ミシモノ再ヒ興リ  
テ帝位ヲ恢復スルニ及テ、「ベニース」又東帝國ノ保庇ヲ  
受クルコト能ハズシテ、「ゼノア」代テ東方通商ノ利ヲ占ム  
ルニ至リ、舊怨ヲ以テ「ベニース」ニ仇スルコト甚ダシク、爲

メニ屢戰端ヲ開キシガ、未タ大戰ニハ至ラサリシモ、「ポ  
ロ」歸國ノ頃ニ及テ遂ニ破裂シテ一大爭亂トナレリ。此  
時「アンドレヤ、ダンドロ」ナル者「ベニース」艦隊ノ總督  
トナリ、「マルコ、ポロ」モ其下ニ附キテ一艦隊ノ將トナリ、  
「クルゾラ」島近海ニ於テ「ゼノア」艦隊ト戰ヒシニ、「ベニ  
ース」方大敗シ「ダンドロ」「ポロ」俱ニ虜トナレリ。「ダ  
ンドロ」ハ囚虜ノ辱ヲ受クルヲ耻チテ、自ラ頭ヲ舷ニ觸レ  
テ死シ、「ポロ」ハ「ゼノア」ニ送ラレテ獄ニ繫カレタリ。  
「マルコ、ポロ」ガ經歷ニ就テハ其聞エ既ニ高カリシカバ、  
ゼノアノ士人多ク獄中ニ訪ヒ來リテ其談話ヲ聽ケリ。  
是以「ポロ」身獄中ニアリト雖亦曾テ囚人ノ思ヒヲナサザ  
リキ。「ポロ」ト同囚ノ人ニ「ピサ」ノ人「ルスチヤノ」  
ト云フモノアリ。  
「ピサ」ト「ゼノア」モ又久シク敵對  
戰ニ於テ虜トナリシナリ。此人有名ノ文人ニシテ著書モ許多アリキ。  
「ポロ」ガ日ニ士人ニ談ス所ヲ聞キ乃チ「ポロ」ニ其紀行  
ヲ書カンコトヲ勸メタリ。「ポロ」即チ「ベニース」ヨリ  
備忘録、日記ノ類ヲ取り寄セ、「ルスチヤノ」ニ筆ヲ執ラ  
シメテ遂ニ一書ヲ著ハシタリ。是乃チ今アル所ノ「マル



コ、ポロ」紀行ナリ。一千二百九十九年ニ至リ「ベーニス」  
「ゼノア」ノ和陸漸ク齊ヒタレバ於是「ポロ」獄ヲ出テ、家  
ニ皈ルコトヲ得タリ。其家ニ皈ル比ヒ、父「ニコロ」没セ  
リ。「ポロ」ハコレヨリ妻ヲ迎ヘ女子三人ヲ擧ケ、平和ノ  
生活ヲ得テ一千三百二十四年齡七十歳ニシテ此度ハ復ビ  
歸ラザル死出ノ旅路ニ赴ケリ。

其紀行ハ四篇ニ分チ、第一篇ニハ歐洲ヨリ蒙古ニ至ル間  
ノ諸國ノ風土人情、奇異ナル風俗習慣等ヲ記シ、又間々歷  
史ヲモ挿入ス。此篇ノ終ニム成吉思汗ノ勃興、蒙古ノ風  
俗、元都宮殿ノ壯觀等ヲ説ク。第二篇ニハ忽必烈ノ容貌、  
性質、政治、其他宮中民間ノ有様及支那各洲巡行ノ記ヲ載  
ス。第三篇ニハ日本ヲ始メ東洋諸島及印度ノ事ヲ記シ、  
第四篇ニハ專ラ土爾其ノ戰亂ヲ記ス。此書實ニ支那元  
朝ノ有様及ヒ當時亞細亞一般ノ關係ヲ記シタレハ、歴史  
家タルモノ、宜シク一讀スヘキ書ナリ。但シ其記ス所  
事實ト違フ所ナキニアラズト雖モ、コレヲハ故ニ作り設  
ケタル虚偽ニアラザレハ、其妄誕ハ妄誕トシテ又見ル  
ヘキ所アルナリ。例之ハ其日本ノ記中ニ「此島ノ王宮ハ

薈クニ黄金ヲ以テシ、敷クニ黄金ヲ以テシ、一宮悉皆黄金  
ナリ。」ト云ヘルカ如キハ大ナル妄想ナリト雖モ、而ルモ  
是、忽必烈カ我島ニ垂涎シテ徒ラニ百萬ノ大軍ヲ海魚ノ  
腹中ニ葬ラシメタルノ原因タルヲ知ルヘキガ如シ。「マ  
ルコ、ポロ」ノ紀行英語ニ譯シタルモノ數多アリ、中ニ就  
テ「コロ子ル、ヘンリー、ユール」ガ注釋ニカ、ルモノ最モ  
完備シ且ツ最モ新シキモノナリ。

○ 讀谷本瑛氏之競争併進説 (前ニ續ク) 清野 勉

右ハ余ガ本論ノ主眼ニ説キ入ラントスルニ先チ谷本氏ガ  
誤謬ノ一小部分ヲ摘出シ讀者諸君ヲシテ谷本氏ノ鹵莽ナ  
ル進化主義ノ如キ貴重ノ學說ヲ取リ扱フニ當リ論理ニ準  
據セズ事實ヲ探知スルコトナクシテ漫ニ之ヲ妄議スル實證  
ノ一斑ヲ知ラシムルニ過キズト雖余ハ信ズ諸君ハ未タ本  
論ノ主眼ニ入ラザルモ豫メ先ツ冒頭ニ於テ谷本氏ノ如キ  
粗漏不致密ノ論者ニシテ夫子自ラ明言セルガ如ク先哲大  
賢ノ効勞ヲ抹殺シ去リ新説發明者ノ地位ヲ占メン杯トハ  
思ヒモ寄ラザルコトナルヲ知ラズ諸君ハ谷本氏ノ如キ脆弱

論者ニシテ晚近人知進歩ノ成績文化ノ英華タル彼ノ化

敗ノ二字ヲ加ヘ優勝劣敗ト熟語シテ生物生存競争ノ有様



ヘキ所アルナリ。例之ハ其日本ノ記中ニ「此島ノ王宮ハ

思ヒモ寄ラザルコナルヲ知ラズ諸君ハ谷本氏ノ如キ脆弱

ノ論者ニシテ輒近人知進歩ノ成績文化ノ英華タル彼ノ化  
石學(パレヲントロヂー)ニ比較解剖學(コンパラチーブ、ア  
ナトミー)胎生學(インプリヲロヂー)ニ訴ヘ此等數學科ヲ  
以テ之ガ材料トナシ之カ證據トナシ外ニ又哲學上ノ大卓  
見ヲ加ヘテ右等ノ數學科ヲ統括(ゼネラリゼーション)シ  
以テ漸クニシテ成レル所ノ進化說ニ向フテ之ニ論鋒ヲ交  
ユルニ足ルカアルノ人傑ナリト思惟スルヤ否ヤ諸君自ラ  
判決スル所アルベキナリ余ハ特リ閑日月ヲ有セザルノミ  
ナラズ右ノ如キ論者ヲマジメガマシク相手取り枝葉ノ議  
論ニ涉リ知ラズ識ラズ本誌ノ体面ヲ傷クルヲ欲セザルガ  
故ニ以下論鋒ヲ轉ジテ直ニ本論ノ眼目ニ向ハントス  
余ハ今本論眼目ノ冒頭ニ於テ優劣ナル二字ノ訓釋(デフイ  
ニション)ヲ立テ以テ豫メ讀者ノ誤謬ヲ來スノ弊害ヲ杜  
絶セザルベカラス何トナレハ我ガ邦現今ノ進化主義家ト  
此主義ニ反對スル者トヲ論セズ多クハ其胸中ニ於テ此優  
劣二字ノ意味ニ就キ確然タル見解ヲ有セサルガ爲メ動モ  
スレバ其議論ヲシテ滅裂セシメ讀者ヲシテ其意ノアル所  
ヲ知ラシメザルノ弊害アレバ也」蓋此優劣ナル文字ニ勝

敗ノ二字ヲ加ヘ優勝劣敗ト熟語シテ生物生存競争ノ有様  
ヲ説明セントスルノコトハ一昨十五年加藤君ガ自著ノ人權  
新說ナル書籍ノ開卷第一ニ特筆大書シ又其内部ニ於テ此  
四文字ヲ丁寧反覆何度トナク操り返シテヨリ以來進化主  
義家ノ口頭ニ登リ今ニ至リテハ特リ進化主義家ト他ノ學  
者論士トヲ問ハス剩エ寒村僻落ノ兒童走卒車夫馬丁ト雖  
動モスレハ右ノ四文字ヲ擔キ出シ一場ノ諧謔ニマデ供ス  
ルニ至レリ新熟語ノ世上ノ流行ニ乘シテ傳播スルノ迅速  
ニシテ且ツ其區域ノ廣キ實ニ驚クニ堪ヘタリ然ルニ加藤  
君ハ此優劣ノ文字ヲ如何ナル義ニ於テ用ヒタルヤ其著書  
ニ於テ之ガ訓釋ヲ降サレバ余輩少シク其意ノアル所ヲ  
探グルニ苦ムト雖今余輩ノ見解ヲ以テスルキハ優劣ノ語  
義タル之ヲ大別シテ二様トナスヲ得ベシト信ズ其一ハ優  
ハ優大優良優等等ノ優ニシテ譬ヘバ生物ノ形体ニ就テ之  
ヲ論ズルハ其裝置(ヲルガニゼーション)ノ有様之ヲ他  
ノ生物ニ比シ更ニ上級ニ居ルヲ云ヒ其体力ニ就テ論スル  
ハハ強弱ノ強ト意味チ一ニシ其生物カ有スル物理的力ノ  
他ノ生物ヲ壓倒スルニ足ルチ云ヒ其精神力ニ就テ論スル



其ハ知情意ノ三者他ノ生物ニ比シ更ニ高等ナルヲ云ヒ其  
 德義ニ就テ論スルモハ更ニ廣ク人生ノ福祉ヲ増進スルノ  
 カアルヲ云ヒ又劣トハ劣弱劣劣等ノ劣ニシテ以上云フ  
 所ノ優ニ反對スルモノアルヲ云フ是レ優劣第一ノ意味ナ  
 リ次ニ優劣第二ノ意味タル二個ノ生物相競争スルニ當リ  
 其競争ノ戰場ニ於テ勝ヲ制スルモノハ優ニシテ之ニ反ス  
 ルモノハ劣ナリト是レナリ

蓋優勝劣敗ナル熟語ニ於テハ優劣ナル文字ニ第一ノ意味  
 ヲ附スルモハ之ヲ以テ一個ノ法則(ロー)ヲラシムルヲ得  
 ヘシト雖第二ノ意味ヲ以テシテハ之ヲシテ一個ノ法則ヲ  
 ラシムル能ハサルナリ何トナレハ萬一此二字ニ附スルニ  
 第二ノ意味ヲ以テシタランニハ優勝劣敗ナル言ハ所謂谷  
 本氏ガ人ナクシテ社會ナシト云ヘルノ言ト其歸着スル所  
 ナ一ニシ所謂假借ノ言ニシテ真誠ノ言ニアラズ即チ勝々  
 敗々ト云フト一般吾人此ノ如キ言ヲ聞ケバトテ毫モ其知  
 識ヲ損益スル所アラザレバナリ」按スルニ方今我が邦ニ  
 於テ進化主義ヲ唱フルノ論者ハ優勝劣敗ノ文字ニ各々二  
 義アルヲ混同シ且ツ優勝劣敗ノ作用ハ生存競争中自然淘

汰ト其ノ行ハル、所ノ區域ヲ同フシ殘ル隈ナク生物世界  
 ノ全域ヲ網羅スルニ足レル唯一ノ定則ナリト妄信シ生物  
 ノ發顯ハ如何ナル發顯ニ至ルマテモ僅ニ此一法則ヲ用ヒ  
 テ説明セントスルガ爲メ往々其語氣ノ窮スル處ニ至レハ  
 (多クハ道辭ニアラスノ已ノ不學ナルヨリ知ラス識ラス)

一處ニアリテハ優劣ノ二字ニ附スルニ第一義ヲ以テシ他  
 ノ一處ニ於ケハ此二字ニ附スルニ第二義ヲ以テスルノ狀  
 ナキニアラス實ニ捧腹絶倒ノ至ナラスヤ譬へハ吾人人類  
 ノ体内ニハ種々ノ寄生動物ヲ生シ人類ノ如キ高等ノ動物  
 即チ第一ノ意味ニ於ケル優者が寄生動物ノ如キ下等動物  
 即チ第一ノ意味ニ於ケル劣者ノ壓當スル所トナリ其生命  
 ヲ斃スアルハ吾人が屢々目撃スル所ナラスヤ僅ニ一種  
 類(スペシース)ノ人類ニ就キテ之ヲ論スルモ其体内ニ寄  
 生スル動物種類ノ夥キ現今學科上ノ研究ヲ以テスルモハ  
 五十有余種ニ登ルト云フ人類ヲ除キ他ノ動物多クハ皆其  
 体内ニ棲息スル寄生動物ヲ有スルモノニメヘルベルト、  
 スペンサー氏ハ其種類ノ多キ動物全域ノ過半ヲ占スト云  
 へリ又博士ヲエン氏ノ說ニ據ルモハ各種ノ動物殆ト皆各

自相異ナル種類ノ寄生動物ノ舍セサルモノナク一種ノ動

劣併進ナル空理ヲ作爲スルノ論者ナレバ優勝劣敗ヲ以テ



義アルヲ混同シ且ツ優勝劣敗ノ作用ハ生存競争中自然淘汰

ヘリ又博士ヲエン氏ノ説ニ據ルルハ各種ノ動物殆ト皆各

自相異ナル種類ノ寄生動物ノ舍セサルモノナク一種ノ動物  
物ガ有スル寄生動物ニシテ時トシテハ之ヲ人身体内ニ棲  
息スルモノニ比シ其種類ノ數更ニ大ナルヲアリト云フ以  
テ寄生動物ノ種類ノ數ニ富メルヲ知ルヘキナリ如何ニ優  
劣敗ヲ以テ生物ノ全球ヲ網羅スルニ足レリト妄信スル  
ノ論者ト雖モ優劣ノ文字ニ各々ニ義アルヲ知リタランニ  
ハ寄生動物ノ其主動物ト競争シテ勝ヲ制スルガ如キ場合  
ニ於テハ優勝劣敗ノ法則タルモハヤ此等ノ場合ニハ通ス  
ベカラサル所以ヲ悟入シタラント雖其妄信ノ惰力ニ兼ヌ  
ルニ語義ノ混同ヲ以テシ是ニ於テ論者ノ不明ナル知ラス  
識ラス優劣ノ文字ニ附スルニ第二義ヲ以テシ其文字ノ外  
形ハ敢テ從前ト異ナルコトナキヲ以テ胡狼ニモ從前ト同ク  
眞誠ノ言ナリト思ヒ誤リ勝々敗々ト全ク意味ヲ同フセル  
無益ノ贅言ヲ吐露シ以テ容易ニ生物ノ發顯ヲ説明シ去レ  
ルガ如クニ信シ論者ガ心事ノ淺サマシキ忸怩タル顔色ヲ  
バナサデ却テ得意然タル風采ヲ粧フニ至ルモノアリ是レ  
論者自家不學ノ致ス所ナリト雖一方ヨリ之ヲ察スルハ  
實ニ愍然至極ノ事ナラスヤ谷本氏ハ優勝劣敗ト相對シ優

劣併進ナル空理ヲ作爲スルノ論者ナレバ優勝劣敗ヲ以テ  
唯一ノ大法トセサルベケレ氏ガ自ラ妄想スル優劣併進  
ナルモノ、外ニ於テハ此ノ優劣併進ナルモノト相對シ優  
劣敗ノ一法則アルノミト認メタルヲ明ナリ然ラハ則チ  
氏ノ如キモ寄生動物ノ己ガ棲息スル主動物ヲ斃スガ如キ  
場合ニ會シタランニハマサカニ此發顯ヲ以テ優劣併進ノ  
致ス所ナリトセザルベケレバ其優劣併進ニ對スル優勝劣  
敗ノ致ス所ナリト信シ上文ノ如キ無益ノ贅言ヲ吐露シ以  
テ之ヲ説明シ去レルガ如ク思惟スルノ徒ナラズヤ此ノ如  
キ不學ノ論者ニシテ先哲大賢ノ名説ニ凌駕シ新説發明者  
ノ地位ヲ占メン杯トハ實ニ非望モ亦甚シカラズヤ但余ト  
雖優勝劣敗ヲ以テ生物界内ニ行ハル一大定期ナリトセザ  
ルニアラザレモ優勝劣敗ノ作用ハ生存競争自然淘汰ト其  
區域ヲ同フスルモノナラズシテ今此四個ノ文字ヲ借り來  
リテ生存競争一部ノ有様ヲ名狀スルニハ最モ便利ニシテ  
此ノ如ク見解ヲ降スルハ余輩ハ人權新説ノ著者ニ向フテ  
其造語ノ効勞ヲ謝セサルヲ得スト雖未タ此一法則ヲ以テ  
シテハ決シテ生存競争ノ全体ヲ名狀スルニ足ラズトスル



ノミ」谷本氏ハヘツケル氏ノ言ナリトテ優劣競争ノ事ハ宇宙萬物ハ勿論吾人人類世界ニ於テモ決シテ絶ユルコアラズ云々ト云ハレタレ也谷本氏ハヘツケル氏ガ此ノ如キ言チ自家ノ舌頭ヨリ放ツヲ直傳シ或ハ此ノ如キ言ヲ其舌頭ヨリ放チタリト云フコトヲ他人ヨリ傳聞シタルヤ但シハヘツケル氏ノ著書中ニ於テ此ノ如キ言アルヲ發見シタルヤ余ヤ固ヨリ淺見寡聞然レモ輒近泰西名流ノ唱道スル進化説ニ於テハ少シク涉獵スル所ナキニシモアラス故ニヘツケル氏ノ著書ノ如キモ其一端ヲ窺フヲ得タリ然ルニ余ハ未ダヘツケル氏ノ著書中ニ於テ眼球ヲ皿ノ如クシテ之ヲ搜索スルモ右ノ如キ言ヲ發見スル能ハス余思フニヘツケル氏ノ如キ大家ニシテ苟モ重大ノ精神病ニテモ襲ハレザルヨリハ右ノ如キ言ハ斷ジテ爲サザル所ナルベシト信ズ何トナレバ優劣ナル文字ハ如何ニ其語義ヲ無理ヤリニ擴張シ又余ガ上文ニ於テ云ヘル第一第二ノ意見ヲ全ク混同シ假リニ此ノ二ツノ意味ヲ合シテ一ツトナシメツタヤタラニ之ヲ使用スルヲ得ルトスルモ其使用スルヲ得ルノ區域ハ生物ノ部内ニ止マリテ礦物ノ如キ無機物或ハ有機

物ニテモ其ノ既ニ生命ヲ失エル有機物（死セル動植物ノ如キ是レナリ）或ハ生命ナキ有機物（蛋白質、脂肪質、澱粉質等ノ一塊ノ如キ是レナリ）ニ至リテハ苟モ之ヲ以テ假リニ生物視（パーソニフィケーション）セザルヨリ之ヲ使用スル能ハザルニ宇宙萬物ハ勿論云々ト云フヲ以テ考フルモハ優劣ノ二字ヲ生物ノ外我カ地球面ニアルトアラユル一切ノ物質ハ無論尙其ノ語義ヲ擴張スルモハ日月星辰ノ如キ天体ニマデ使用スルコト明ナルノミナラス又一ツニハ進化主義ニ於テ競争ト云ヘル語ハ尋常使用セル競争トハ其意味大ニ廣濶ニシテ特リ生物ト生物トノ間ニ行ハル關係ノミナラス生物ト無機物トノ間ニ行ハル、關係ニ至ルマテ之ヲ使用スト雖無機物ト無機物或ハ有機物ニテモ既ニ生命ヲ失ヒ或ハ生命ナキ有機物ト有機物トノ間ニ行ハル、關係ニ使用スベカラスシテ又吾人ハ如何ニ神心ヲ勞スルモ此ノ如キ物質間ニ實際競争ノ有無ハ姑ク措キ之レヲ想像的ニダモ腦裏ニ出現スル能ハザレバナリ知ラズヘツケル氏ハ精神的ノ病痾ニ罹レルヤ否ヤ若シ谷本氏ニシテ知ルアラバ請フ之ヲ教ヘヨ

理醫學講談會筆記

右の試験より考ふれを或る液体は善く混り又或る液体は



理醫學講談會筆記

炭素ハ變化(前號の續き)

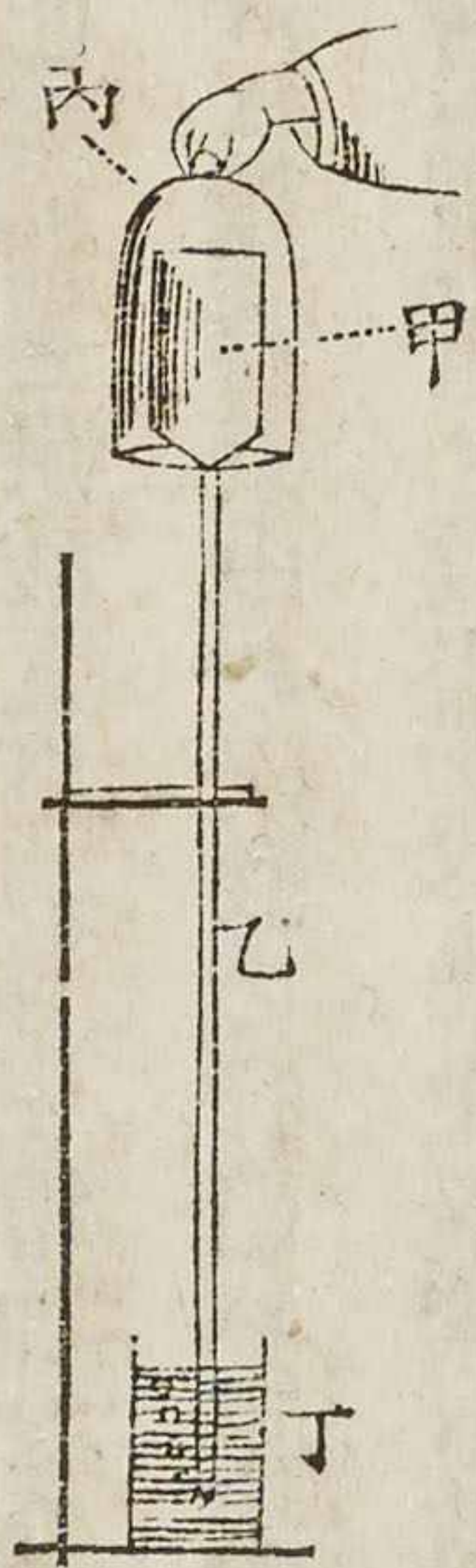
櫻井錠二君

炭酸瓦斯の空氣より重きとは前の試験ふて善くお譯りになりたらん併し其重さに關らず空氣中の炭酸の量ハ富士山の頂上にて一ツ橋通の如き低き所にて一様であります今其理を説きます前に先づ液体に就きて少々お話を仕まじよふ此の「シリンドル」の中に「クロ、フォルム」と色を着けたる水があります之を烈しく攪き雜れを一時は混合する様なれども暫くして以前の通りに二層に別れます第二の「シリンドル」には二種の無色の液があります遠方からでは一種の様に見へれども其の二種なるを示さん爲メ蠟の一片を其中へ落します蠟は御覽の通り途中に止まりて底まで落ちません其譯ハ上層の液は「アルコホール」よして蠟より輕きもの又下層は水にして蠟より重きものなればなり今この中へ棒を入れて攪き雜れば二種の液体全く混合して一様のものを生じます此混合したる液は蠟より輕きと以て蠟は「シリンドル」の底に落ちました

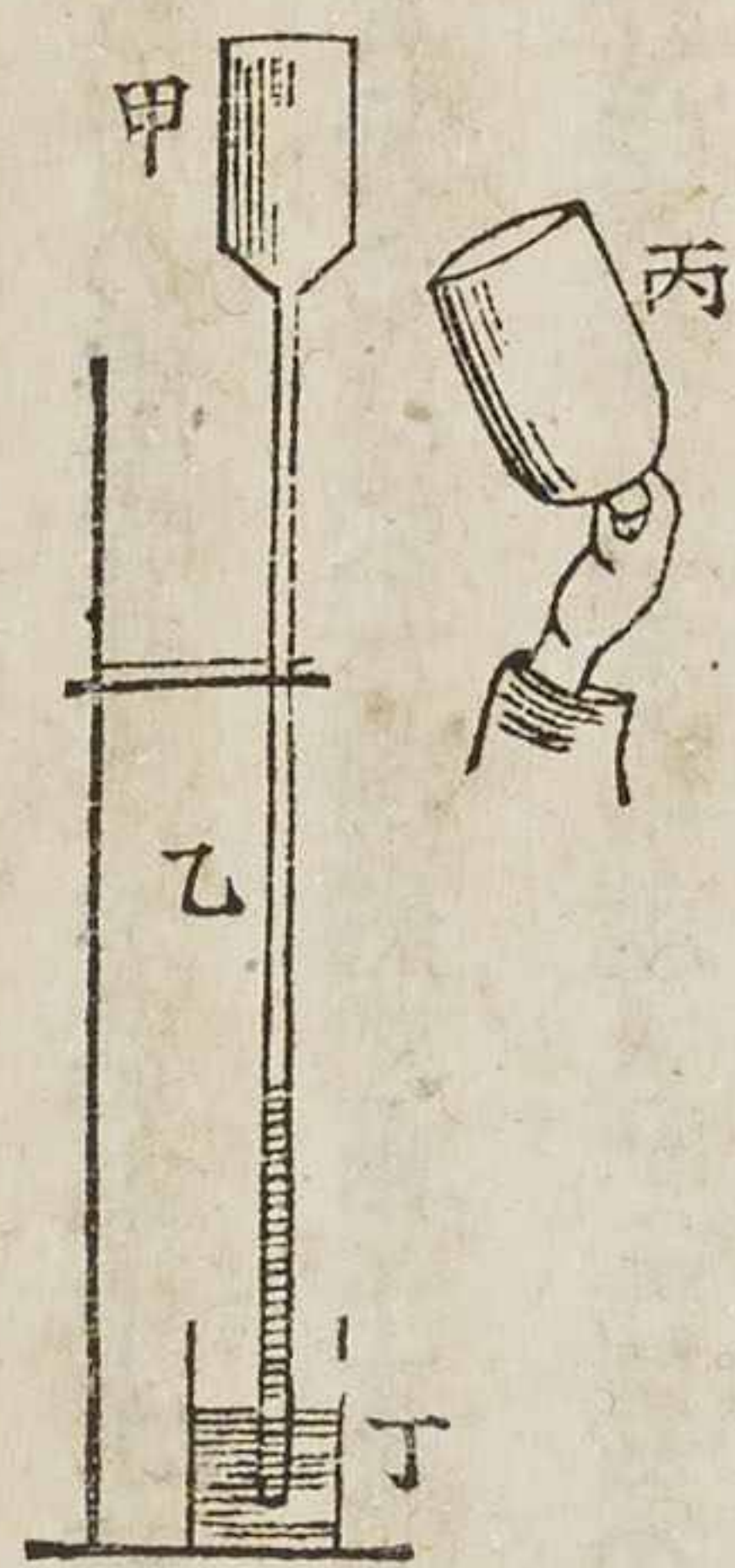
右の試験より考ふれを或る液体は善く混り又或る液体は少しも混り得ませんと明かであります

瓦斯体は液体との違ひ何種類のもので善く相互に混り合ひます此の「シリンドル」の底の方メ過酸化窒素と謂へる一種の鶯色の瓦斯があります其上ハ通常の空氣ふて只今ハ二種の瓦斯体のあると眼にて譯れども暫時此間メ二体相互に混合して一様のものを生じますさて過酸化窒素は空氣より重きもの又空氣は從て過酸化窒素より輕きものなれども第一の瓦斯は上に流れ第二の瓦斯ハ下に流れて自然と交和致しますさて瓦斯体の流れ様の速度に至ては大層の差があります重き瓦斯ハ遅く流れ輕き瓦斯ハ早

第一圖



第二圖



しと云へば御譯りでありますよふが尙之と証せん爲試験を施します此所にある器械は素燒の瀬戸物を以て製り



たる「シリンドル」(甲)と一本のガラス管(乙)より出來て居ますさて水素は瓦斯中にて最も輕きもの故其の流れ様も最も速であります今水素瓦斯を以て充ちたるガラス鐘(丙)を右の「シリンドル」に被せば「シリンドル」の内には空氣があり其外には水素瓦斯ある故兩方の瓦斯が相互に交和すれども水素の「シリンドル」内へ流れると空氣の「シリンドル」外へ流れ出るよりも急なる故「シリンドル」の内には壓力が増加し遂に瓦斯の一部分はガラス管(乙)を通り下の水(丁)を押し別けて外に逃げます(第一圖を見よ)今ガラス鐘を取り除けば「シリンドル」の内には水素が多分にあり又其外には空氣がある故丁度以前と反對の現象を顯します即ち御覽の通り水ハガラス管の中へ上ります(第二圖を見よ)

不斷空氣の成分を一様に致して居ます併し何故に毎日諸方より出る所の炭酸瓦斯が空氣中へ積りて其量か日々増加しないと云とは未だ判然と申上ません  
先刻草木は生長すると云ふ就きて諸君の御注意を惹起しよした此事柄と炭酸瓦斯の日々増加せないとを合せて考ふれば是非空氣中の炭酸の行衛ハ草木に歸します即ち炭酸瓦斯が炭素と酸素に分解し炭素ハ草木の骨肉を成生し酸素は空氣中へ遊離されて人間動物の生活を助けます斯の如く動植物は相互に其助を得て生活する様を都合であります  
さて凡て物体の成生するときには多少の熱を發し又其物体の分解するときには成生の際發したると同量の熱を吸收するとい夥多の實驗に照らして疑ふべからざる事實而已ならず化學上最も緊要なる原則であります今炭素と酸素より炭酸瓦斯の生ずるを考ふれば其際多量の熱を發します故に炭酸瓦斯の分解して炭素と酸素に變するときには多量の熱を吸收するとい最も至極であります此の吸収する熱は何所より來るやと問ふは太陽即ち其源であります

まず太陽のよく照る所にては草木もよく生長し果實もよ



りません瓦斯体の交和ある而已ならず風其他の原因有て

さるゝ熱は何所より來るやと問ふよ大陽即ち其源であり

まず大陽のよく照る所にては草木もよく生長し果實もよく熟し又大陽の照らない所では草木のよく生長せざるハ誰も知るをであります故に若し此の地球上に巖石而已在りて植物無ければ地球の温度は現在より余程高くなければなりません

斯の如く大陽の熱(及び光)の一部分ハ草木の生長に依て吸收され即ち草木中ハ保存さるゝのであります此故に草木を燃し又ハ草木より製する所の炭、油、蠟、或ハ又數千萬年前の草木より生じたる石炭等の熱焼に際し炭酸瓦斯と共に發する所の熱及び光は取りも直さず大陽の熱及び光であります

石炭を焚きて蒸氣を生じ蒸氣の力に依て動く所の船、車、等は斯の如く皆を大陽の力に依るなり私が講義と始るに當り述べましたるステブソン氏の語ハ實に意味の深きとではありませんか諸君も今日後蒸氣車、蒸氣船等を御覽に成ても或は又草木の青々と生長するのを御覽に成ても斯の如き深き意味あるをに御氣の付かれんと願ひます

(終り)

水ノ話(流水ノ作用)

巖谷立太郎君演述

吾人が幼稚ナルキ小學ニ入り始テ習フ所ノ以呂波ハ諸君モ熟知セラル、如ク空海上人ノ作ニシテ人類ノ無常ナルヲ悟ラレタル歌ナリト云フ乍去無常ナルハ唯人類ニ限ラズ凡ソ天地間ニアルトアラユル物ハ皆ナ太古ヨリ今日マデ少シモ變更セザル物ハ之レアラザルナリ左レバ我が地球ノ如キモ其初メヨリ今日マデ始終變更シ來リタルモノニシテ神武天皇御宇ノ地球ハ明治天皇御宇ノ地球ト異ナリ昨年ノ地球ハ今年ノ地球ト異ナリ今年ノ地球ハ又多少來年ノ地球ト異ナルベシ而シテ地球ノ斯ク斷ヘズ變遷スルニハ必ズ原因ナキヲ得ザレバ理學者ハ種々勘考ヲ廻ラシテ四ツノ原因ヲ發見シタリ即チ第一水第二火山第三大氣第四有機物はナリ今夕予が諸君ニ向テ述べント欲スル所ノモノハ即チ此水ノ事ニシテ抑モ水ハ如何ナル作用ニ依テ我地球ヲ變更スルヤヲ略述セントス此作用ヲ講ズルニ先チ一言セザル可ラザルコアルハ他ナシ水ノ無盡藏ナルコ是ナリ諸君モ熟知セラル、如ク大陸



ニハ數千ノ河流アリテ日々數萬斛ノ水ヲ大海ニ注入スル  
 モ未タ河流ノ乾涸シタルヲ見ズ未ダ大海ノ漲溢シタルヲ  
 聞カズ抑モ大海ハ其水ヲ何處ヘ注キ河流ハ其水ヲ何處ヨ  
 リ資ルヤ是レ他ナシ空氣中ニ注ギ空氣中ヨリ資ルナリ即  
 チ海水ハ絶ヘズ蒸發シテ空中ニ昇リ霧トナリ雲トナリ雨  
 トナリ雪トナリテ再ビ河水ヲ供給スルナリ  
 夫レ氷ハ如何ナル温度ニテモ必ズ多少蒸發スルモノナレ  
 バ何處ノ空氣モ必ズ多少蒸水氣ヲ含蓄スベシ而シテ温度高  
 ケレバ從テ其量モ多キガ故ニ熱帶地方ノ空氣ハ寒帶地方  
 ノ空氣ヨリモ多量ノ水蒸氣ヲ含蓄スルヤ明カナリ夫レ萬  
 物熱ニ遭ヘバ膨張スルハ自然ノ大規律ニシテ萬物膨張ス  
 レハ其重量ヲ減ズルヤ又明カナレバ熱帶ノ空氣ハ膨張シ  
 稀薄トナリ昇騰シテ寒帶地方ニ流散シ漸次ニ寒冷ノ空氣  
 ニ觸レ雲トナリ雨トナルハ猶ホ夏時冷水ヲ盛リタル品杯  
 ニ水蒸氣ノ露結スルガ如シ然リ而シテ寒帶ノ空氣ハ熱帶  
 ノ地方ニ來リ此處ニ於テ再ヒ多量ノ水蒸氣ヲ含蓄シ寒帶  
 ニ歸リ雲雨ヲ起シ河流ノ水ヲ供給スルナリ  
 地水ノ蒸發シテ雲雨ヲ起スヲ斯クノ如シ若夫レ雨水ノ量

ハ各所相同シカラズト雖モ概ノ云フ所ハ温暖ナル處ハ寒  
 冷ナル處ヨリモ多ク大洋ニ近キ國ハ大洋ニ遠キ國ヨリモ  
 多シト知ルベシ左ニ各處ノ一年間ノ降雨ノ量ヲ示スベシ

亞米利加洲熱帶ノ國 九尺

印度地方西岸 三三尺

南歐羅巴洲 三尺

南獨逸 二尺

東京 五尺

京都 四尺

長崎 九尺

青森 三尺半

右ノ表ニ因テ見ル所ハ年々降雨所ノ雨水決シテ小少ナラ  
 ズ而シテ此雨水ハ皆ナ地水ヨリ蒸發セシ者ニ外ナラズ宜ナ  
 リ大海ノ萬古膨張セズ河水ノ萬古乾涸セザルヤ實ニ造化  
 主ノ妙工豈ニ驚クニ堪ヘザランヤ  
 以上水ハ空氣ヨリ來リ空氣ニ歸リ斷ヘズ新陳代謝ノ其無  
 盡藏ナル所以ヲ畧述シタレバ進ンデ本題ニ入り水ハ如何  
 ナル作用ヲ以テ我地球ヲ變更スルヤヲ講ゼントス

扱テ水ハ如何ナル形狀ヲ以テ我地球ヲ變更スルカト尋ヌ

之ヲ尋ル所ハ其小流ナルモ既ニ非常ノ勢力ヲ逞フシ河底



地水ノ蒸發シテ雲雨ヲ起スヲ斯クノ如シ若夫レ雨水ノ量

ナル作用ヲ以テ我地球ヲ變更スルヤヲ講ゼントス

扱テ水ハ如何ナル形狀ヲ以テ我地球ヲ變更スルカト尋ヌルニ流水トナリ湖海トナリ氷河トナリ種々様々ニ其形ヲ變ヘテ働クコナレバ余ハ之ヲ別テ流水ノ作用湖海ノ作用氷河ノ作用トナシ逐次ニ講述セントス先ヅ流水ノ作用ヨリ始ムベシ

試ミニ大雨ノ後ニ峻坂ニ到リ見ルト雨水ハ無數ノ細流ヲ爲シ砂礫泥土ヲ流送シ漸次下ルニ從ヒ細流ハ合シテ稍ヤ大流トナリ從テ砂礫ノ稍ヤ大ナルモノヲ流送スルアリ其益々下リテ平地ニ接スル處ニ到リ見ルト雨水ノ斯ク流送シ來リタル小石ヲ堆積スルアリ其順序ハ先ヅ砂礫次ニ泥土ト輕ロキモノ程ト下部ニ堆積スベシ由是觀之ハ此雨水ノ細流ハ一方即チ上部ニ於テハ砂礫ヲ流送シ地面ヲ減削シ又一方即チ下部ニテハ砂礫ヲ堆積シ地面ヲ造成ス是レ則チ流水ノ作用ニシテ屋ヲ遶ル點滴モ華巖ノ如キ大瀑布モ又如斯基雨水ノ細流モ信濃川ノ如キ大河モ其作用ノ理ハ毫モ異ナルコトナシ唯タ水量ノ多少ニヨリ其工程ニ大小ノ差アルノミ左ニ大河ノ作用ヲ述ベ之ヲ證セン凡テ江河ノ源ハ皆ナ高山ニアルヲ以テ試ミニ高山ニ登リ

之ヲ尋ルルハ其小流ナルモ既ニ非常ノ勢力ヲ逞フシ河底ヲ穿鑿シ巖石ヲ流送スルヲ見ルベシ若夫レ巨大ノ巖石ノ横ハルアリテ河水ノ進行ヲ妨クルルハ河水ハ絶ヘズ之レニ激衝シ其流送シ來リタル砂礫ヲ以テ其縁ヲ磨除シ小石ヲ以テ其角ヲ剝削スル恰モ玉石工ノ金剛砂ヲ用ヒテ製作スルニ異ナラザレバ巨大ノ巖石モ漸次ニ小塊トナリ一度暴雨ノ降ルニ遭フカ或ハ深雪ノ融クルニ際シ俄ニ水量ノ増加スルルハサシモ堅固ニ見ヘタル巖石モ遂ニハ轉落シ流送サレ破壊サレ細末ニサレテ海ニ入ルニ到ルナリ」斯ク勢力ヲ有セル細流カ合シテ稍ヤ大流ヲ成スヤ其勢力ハ實ニ恐ルベキ程強大ニシテ屋大ノ巖石ヲモ容易ニ流送スベシ諸君ノ中ニハ山川ヲ跋涉セラシ人モ定メテ少ナカラザルベシ山川ヲ跋涉スルノ際少シク注意スルルハ路傍又ハ其他ニ巨大ナル巖石ノ轉落シアル所アリ扱テ土人ニ向ヒ何故ニ斯カル大石ガ此邊ニアルカト尋問スレバ此石ハ大昔熊野權現ガ某天狗ト爭論サレシ其之ヲ礫トシテ擲デラレタレバ礫石ト云フトカ或ハ弘法大師カ旅人ノ難義ヲ救ハンガ爲メ路上ニアリタルヲ此處ヘ擲タレバ擲石ト



云フトカ或ハ役ノ行者が袂ニ入レテ持運バレタレバ袂石  
ト云フトカ必ズ不可思議ノ傳説アルヲ告グベシ熊野權現  
ガ如何程ノ神力ヲ有スルモ弘法大師ガ如何程ノ佛力ヲ有  
セルモ役ノ行者ガ如何程ノ通力ヲ有セルモ斯カル大石ヲ  
容易ニ擲テウルノ謂ハレナシ畢竟之レ皆ナ流水ノ持チ來  
リタル者ニ外ナラザルナリ  
扱テ流水ハ何故ニ神佛ニモ勝リテ斯カル大石ヲ流送シ得  
ルカト云フニ前述ノ如ク流水ハ非常ノ勢力ヲ有スルノミ  
ナラズ又一種特別ノ性質アリ其性質トハ即チ萬物水中ニ  
於テハ其容量ニ均シキ水量ノ重サダケヲ減少スルコト是ナ  
リ例ヘバ岩石ノ比重二〇五ナルキハ其大氣ニ在テハ二百  
五十貫目ノ重量ヲ有スルモノハ水中ニテハ僅カニ百五十  
貫目ヲ有シ百貫目丈ケヲ減少スルナリ  
流水ハ非常ノ勢力ヲ有シ兼テ又斯カル性質ヲ具スレハ能  
ク巨大ノ岩石ヲモ流送スルナリ曾テ千八百十八年スイツ  
ツル國ノウアリス州ナルバニエン川ニ流レ來リタル花崗  
石塊ハ其容積六十六坪余アリタリト實ニ盛ナリト云フベ  
シ

河水ノ巖石ヲ破壊シ川底ヲ穿鑿シ溪谷ヲ造成スルハ其瀑  
布ヲ有スルモノニ於テ最モ著シトス其故ハ多量ノ河水瀑  
布トナリ千仞直下スルヤ其下モニ於テ旋轉狀ノ波浪ヲ起  
シ以テ其背傍ノ巖石ヲ衝破シ漸次ニ空洞ヲ穿ツベシ既ニ  
空洞ノ生ズルアレバ其上層ノ岩石モ自ラ保持スルヲ得ズ  
シテ破壊轉落スベク斯クシテ瀑布ハ漸次ニ其位置ヲ退キ  
下流ナル溪谷ヲ增長スルヲ以テナリ夫ノ有名ナル米國ナ  
イヤガラ瀑布ハ亞米利加瀑布ノ幅百七十九間高サ十六丈  
ホールスシウ瀑ノ幅三百十七間高サ十五丈余ニシテ其上  
層七丈ハ石灰石其下層ハ盤石ナリ而シテ此巨大ノ水量ハ直  
下シテ先ヅ盤石ニ空洞ヲ穿ツヲ以テ上層ナル石灰石層ハ  
支持スルヲ得ズシテ自ラ轉落ス斯ノ如クニシテ年々約二  
尺ヲ退歩スト云フ我國日光ノ華嚴瀑布ノ如キモ必ズ年々  
退歩スルヤ蓋シ疑フベカラズ  
流水ノ巨巖砂礫ヲ流送シ以テ漸次ニ山岳ヲ洗削シ深溪幽  
谷ヲ穿鑿スルノ理ハ零ボ前述ノ如シト雖モ此作用ハ特ニ  
其上流即チ急流ニ於テ行ハル、モノニ其下流即チ緩流  
ニ於テハ大ニ之レト相反スル所ノ作用アルヲ見ン

凡ソ河水ハ其細大ヲ論セズ皆ナ下流ニ到ルニ從ヒ漸次ニ

斯ノ如ク下流ニ於テ沈積スルト雖モ其極微ナルモノハ猶



凡ソ河水ハ其細大ヲ論セズ皆ナ下流ニ到ルニ從ヒ漸次ニ  
 流勢ヲ減ズルモノナレバ上流ヨリ流送シ來リタル所ノ砂  
 礫泥土ハ此處ニ於テ次第ニ沈積シ河床ヲ埋没スルヲ以テ  
 遂ニ河水ハ堤ヲ超ヘ氾濫シ新ニ支流ヲ造ルニ到リ本流ハ  
 反テ乾涸シ砂川トナレルコトアリ而シテ此支流ノ漸次埋没シ  
 テ又新支流ヲ造ルヤ一ツニ前者ニ異ナラザレバ數千年ノ  
 星霜ヲ歷ルノ後チニ到レハ此流水ノ爲メニ莫大ノ平地ノ  
 嵩マルヲ見ルベシ蓋シ我國ニテモ斯ノ如ク其下流ノ位置  
 ヲ變更セル河水少シトセズ  
 若シ又河流ノ兩傍ニ人家アルカ或ハ田畑アルカハ河床次  
 第ニ埋没シ河水氾濫ノ恐レアルヲ以テ土民ハ堤防ヲ築キ  
 之レヲ防クベシ然ルカハ河水ハ更ニ河床ヲ埋没スルヲ以  
 テ土民モ又更ニ堤防ヲ増築スヘシ如斯クニシテ斷ヘス止  
 マザルカハ河床次第ニ嵩マリ遂ニハ平地ヲ拔クコト數十丈  
 ニ到ルナリ現ニ兵庫神戸間ニアル所ノ淺川堺大坂ノ間ニ  
 流ル、所ノ吉野川等ハ皆ナ平地ヨリ高キコト數十丈ナルヲ  
 以テ之ヲ見ルベシ  
 河水ノ流送シ來リタル所ノ砂礫泥土中稍ヤ粗ナルモノハ

斯ノ如ク下流ニ於テ沈積スルト雖モ其極微ナルモノハ猶  
 ホ流送サレテ海ニ入ルナリ而シテ若シ河口湖水ナルカ或ハ  
 海水ナルモ潮水ノ満干甚シカラズ激浪ノ生ズルコトナキカ  
 ハ此細微ノ泥土ハ河口ニ於テ漸次ニ沈澱シ以テ遂ニハ新  
 ニ數頃ノ平地ヲ造成スルニ到ルヤ蓋シ其例少シトセス而  
 シテ斯ク造成サレタル地面ハ其形チ多クハ三角ナルヲ以テ  
 之ヲ三角洲ト稱ス  
 凡ソ河水ハ上流ニ於テハ山岳ヲ洗削シ砂礫ヲ流送シ又下  
 流ニテハ砂礫ヲ沈積シ地面ヲ造成スルハ萬々疑フベカラ  
 ズト雖モ其幾何ノ山岳ヲ崩壞シ幾何ノ平地ヲ造成スルヤ  
 即チ流水カ地球ノ變更ヲ助クルノ度ハ如何ト尋ルニ一ツ  
 ハ水量ノ莫大ナルヲ考ヘ又一ツハ其作用ノ永久ナルヲ察  
 スルカハ決シテ小少ニ非ザルヤ明カナリト雖モ河水ガ年  
 々海ニ流送スル所ノ土砂ノ量ヲ算測セバ更ニ明瞭ナルベ  
 シ然ルニ河水ノ年々運送スル所ノ土砂ノ量ハ河水ノ大小  
 流勢ノ緩急地質ノ硬軟氣候ノ寒温等ニヨリ同シカラザレ  
 バ左ニ數例ヲ舉ゲン  
 北亞米利加州有名ノ大河「ミシシピ」ハ其長サ三百余里



其幅川口ニテ十三町深サ二十尋其河領ノ面積八千方里ニシテ其年々「メキシコ」灣ニ流送スル所ノ泥土ノ量ハ三千七百六十萬五千三百余坪ニシテ以テ五町半立方ノ丘陵ヲ造ルニ足レリ

印度國有名ノ大河「ガンジス」ハ長サ百二十里河領ノ面積二千二百方里ニシテ年々二千八百六十四萬六千二百坪ノ泥土ヲ流送ス是レ又以テ五町立方ノ丘陵ヲ造ルニ足レリ

獨逸國ノ萊因川ハ長サ六十里河領ノ面積六百四十方里ニシテ年々流送スル所ノ泥土六十九萬四千七百二十余坪以テ八十八間立方ノ丘陵ヲ造ルニ足ル

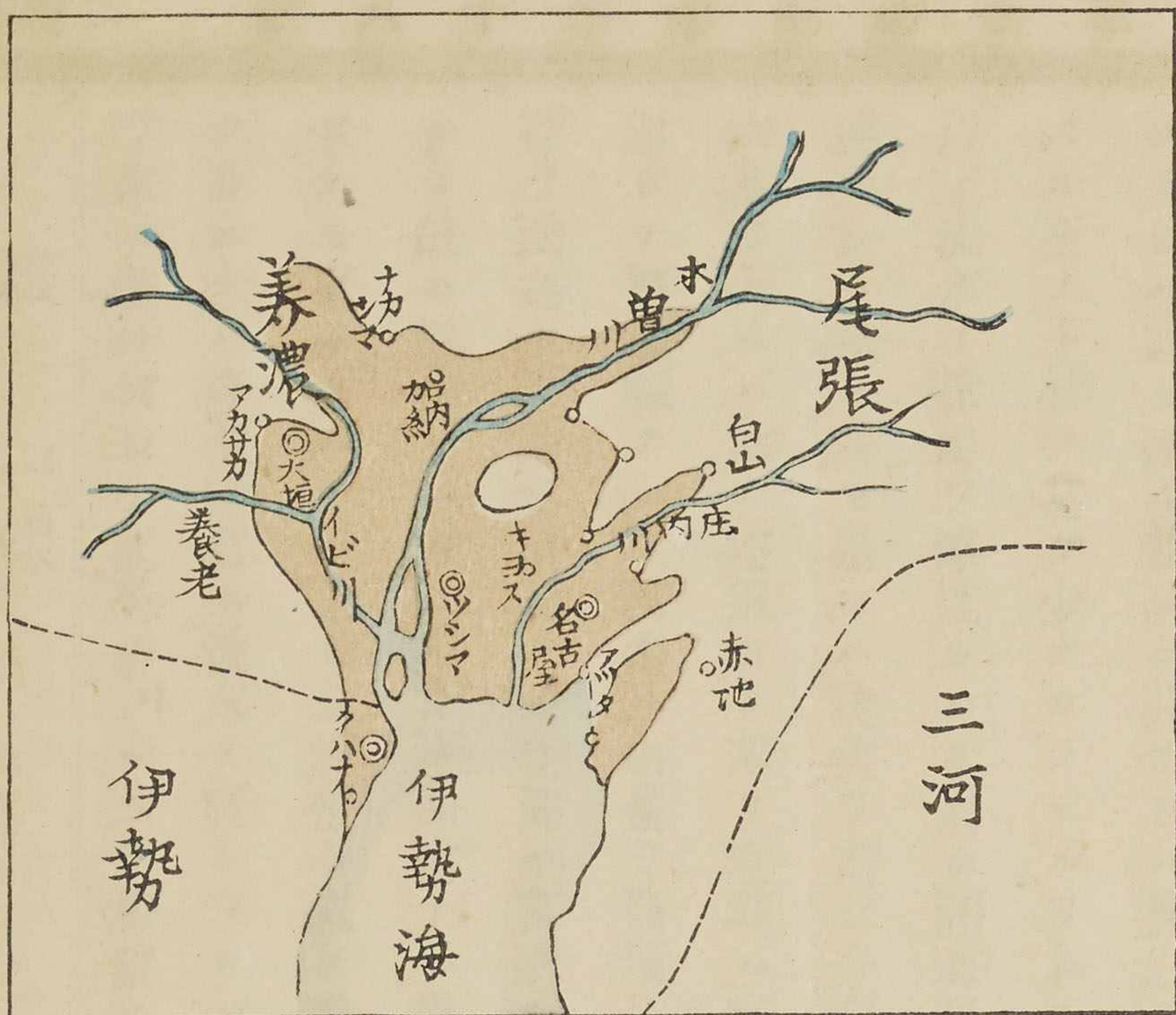
水曾川ハ其源ヲ信濃筑摩郡ニ發シ道ニ王瀧川等ノ諸流ヲ合セ美濃ニ入り尾張伊勢ヲ過テ海ニ入ル長サ四十六里余而シテ其年々伊勢海ニ流送スル所ノ土砂少々ナラザルハ美濃尾張兩國地質ノ變遷ニヨリ推知スベシ甲圖ニ於テ着色セザル部分ハ右兩國往古ノ地圖ニシテ三河國猿投宮ノ寶藏ヨリ出タルモノナリ蓋シ千有余年以前ノモノナリト云フ而シテ其茶色ヲ以テ示シタル處ハ其以後増加シタルモノニ

關ハリ水曾川揖斐川庄内川ノ土砂ヲ流送シテ新造シタル者ト知ルベシ爰ニ一話アリ天保八年四月中旬ニ尾張津島ニ於テ農民等池水ヲ乾シ魚類ヲ得ントセシニ池底ニ大ナル船体ノアルニ會シタレバ之ヲ檢セシニ一本ノ木材ヲ以テ造リ長サ十四間幅七尺二寸深サ三尺乃至四五尺ニシテ我國ノモノトハ見ヘズ是レハ多分此地ノ往古海ニテアリシハ破船セシ唐船ナルベシト云ヘリ又以テ蒼桑ノ變ヲ徵スルニ足ルナリ

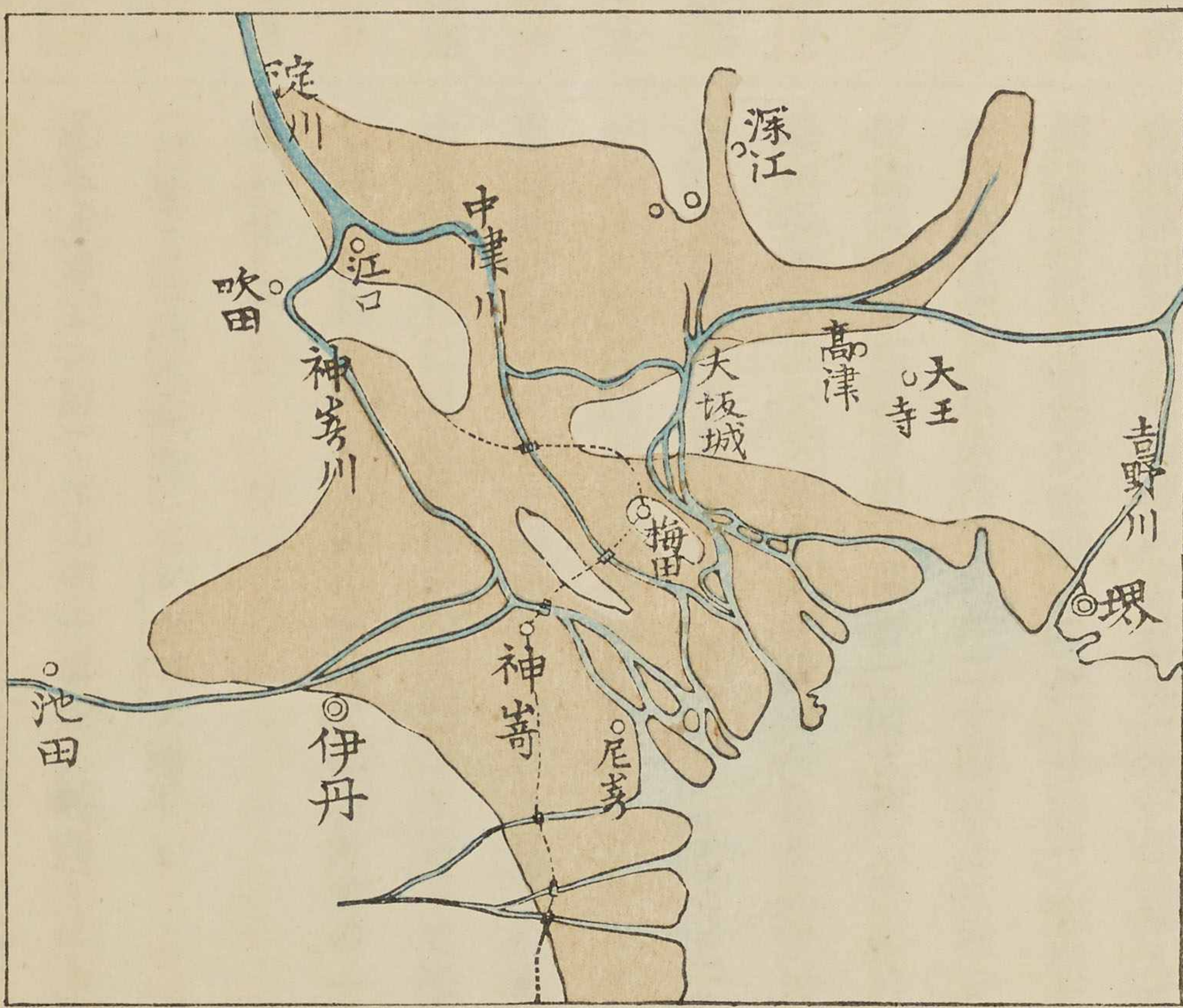
淀川ハ其源ヲ近江琵琶湖ニ發シ山城攝津ヲ經テ道ニ桂川芥川ノ諸川ヲ容レ神崎中津ノ諸川ニ分流シ東成西成二郡ノ中ヲ經大坂城ノ北ヲ繞リ難波橋下ヨリ南北ニ分レ南土佐堀トナリ北堂島川トナリ中ノ島ヲ匯リテ相會シ江ノ子島ニ到リ再分シテ安治川木津川トナリ海ニ入ル其長サ勢多橋下ヨリ約二十里トス而シテ其年々流送スル所ノ土砂ノ量ハ未ダ算測シタルコトナケレバ之ヲ詳ニスベカラズト雖モ其小少ナラザルハ大坂近傍地質ノ變遷ニ因リ之ヲ徵スベシ今乙圖ニ於テ着色セザル部分ハ即ハチ往古難波ノ圖ニシテ其茶色ヲ以テ示セル所ハ其後増加セシモノニシテ



甲 圖



乙 圖



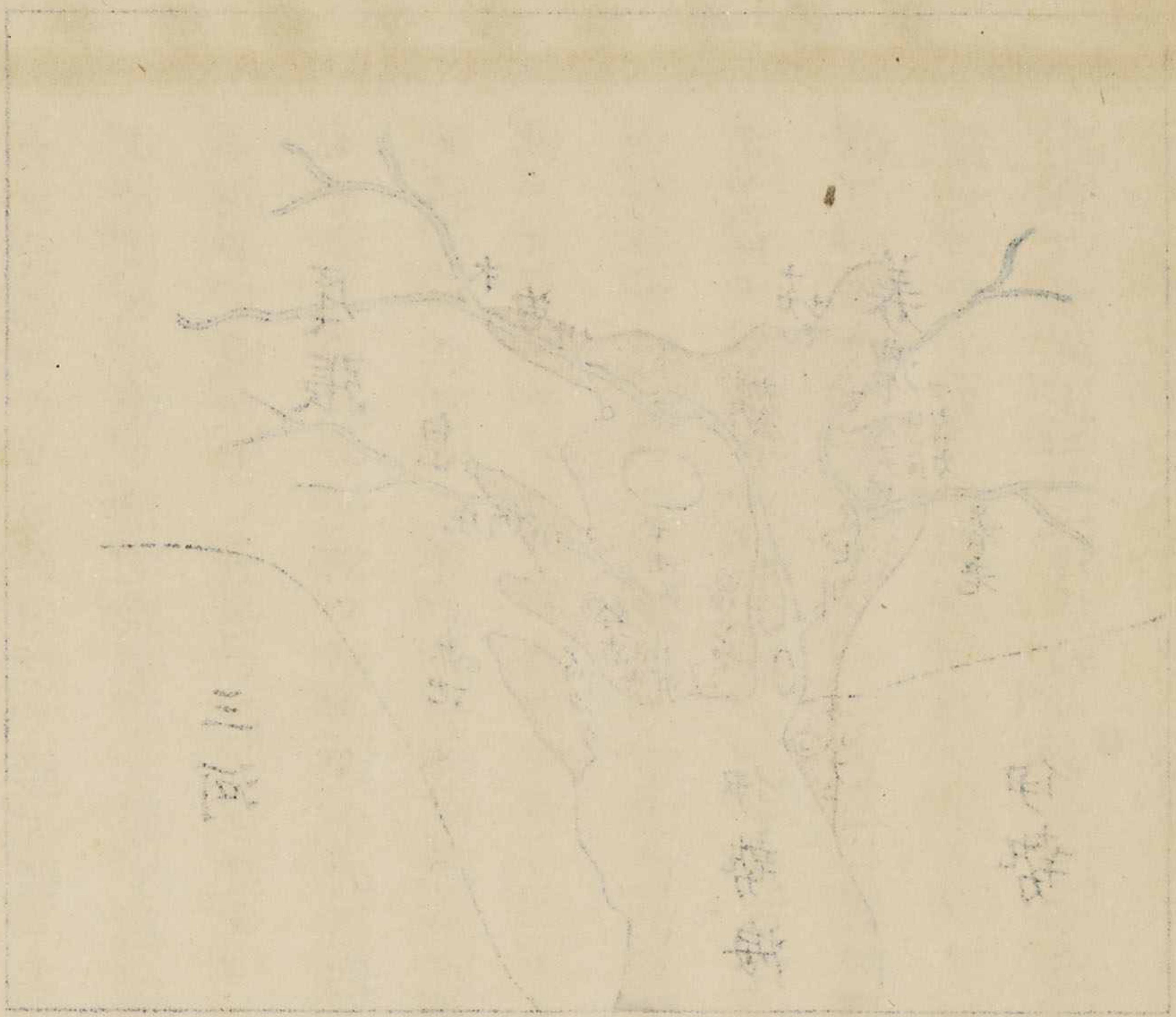
此圖ハ小藤文二郎君關谷清景君カ往古及ビ近世ノ圖ヲ對照シテ製サレタル精密ナルモノヨリ縮寫シタルナレバ何分小圖ナレバ精細ニ摸シ得ズ其大略ヲ示スノミ

テ示シタル處ハ其以後増加シタルモノニ

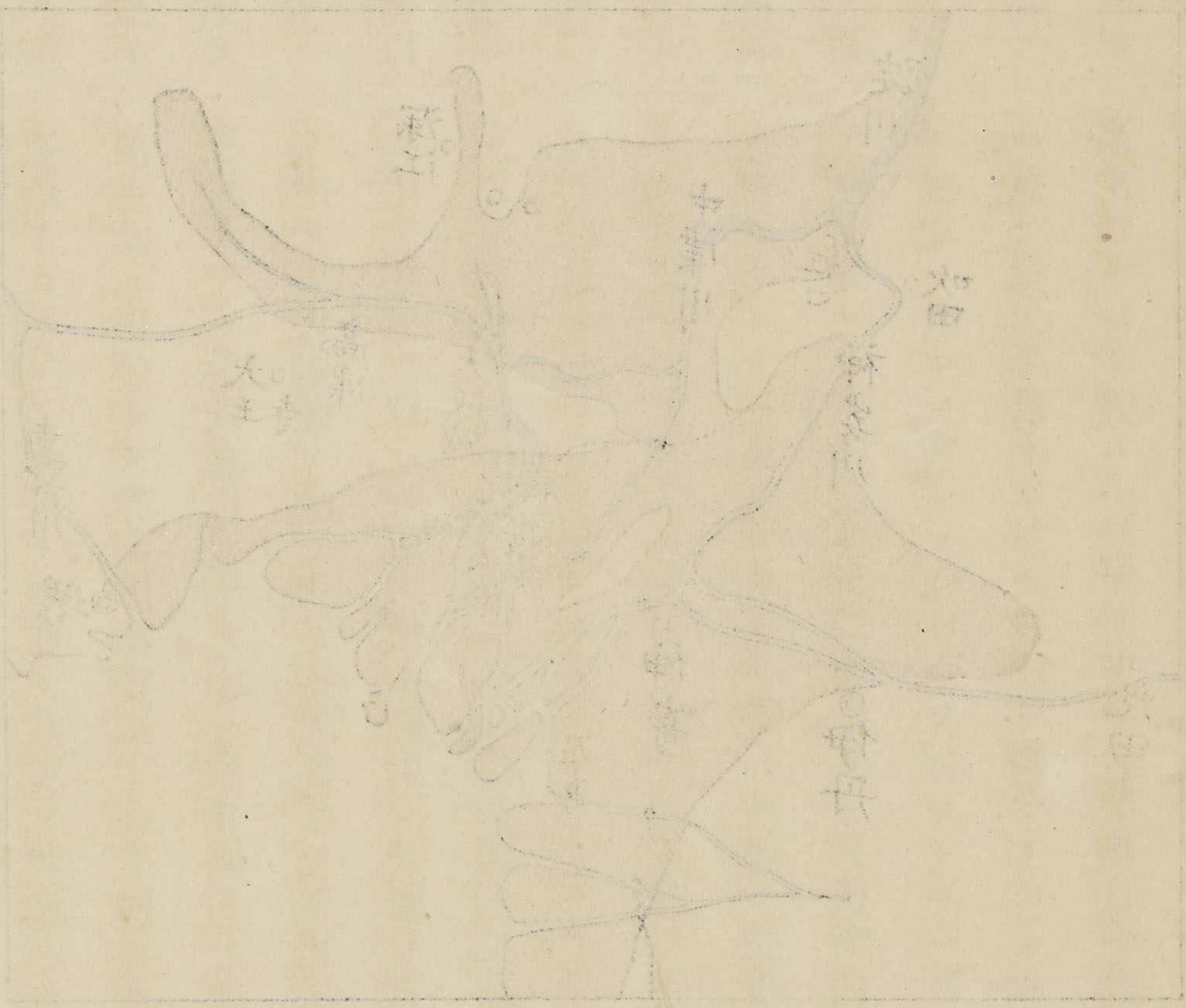
ニシテ其茶色ヲ以テ示セル所ハ其後増加セシモノニシテ



甲 圖



乙 圖



蓋シ淀川諸流カ其流送シ來リタル泥土ヲ以テ新造シタル  
より二十三日に至る六日の間マダデブルグ府に於て舉行

蓋シ淀川諸流カ其流送シ來リタル泥土ヲ以テ新造シタル

より二十三日に至る六日の間マダデブルグ府に於て舉行



蓋シ淀川諸流カ其流送シ來リタル泥土ヲ以テ新造シタルニ外ナラズ往古此邊ノ漸次埋没シ沼湖ノ形チニ變シ蘆等ノ繁殖セシコハ歌ニ難波瀾蘆ノ假寢ト詠シ難波江ノ蘆ノト云ヒ蘆シトサヘ云ヘバ必ス難波ト云ヒ又蘆刈ト稱スル能樂ノアルヲ以テ之ヲ證スルニ足レリ然レバ其猶ホ沼湖タリシハ甚ダ遠キ昔シニ非サレハ又以テ淀川ガ年々流送スル所ノ土砂ノ甚タ少ナカラサルヲトスヘシ  
以上流水ノ作用ヲ略述シタリ猶ホ湖海及ヒ氷河ノ作用ヲ述ベント欲スルモ是レハ後會ヲ期シ今夕略述シタル所ノ大要ヲ云ヘハ水ハ空氣ヨリ來リ空氣ニ歸リ斷ヘズ新陳代謝シテ無盡藏ナルコ流水ハ山岳ヲ崩壞シ溪谷ヲ穿鑿シ土砂ヲ流送シ平地ヲ增高スルコ即チ高所ヲ削リ底所ヲ埋ムルコ故ニ流水ハ一方ニ於テハ如何ナル岩石ヲモ破壞流送スルモ又一方ニテハ之レヲ堆積シ以テ平地ヲ新造スルコナレハ余ハ今夕諸君ニ流水ノ話シヲナシタルモ諸君ハ之ヲ水ニ流サズシテ記憶アラントコヲ希望ス

雜報

(獨逸理醫學者第五十七回集會) 同會ハ去る九月十八日

より二十三日に至る六日の間マクデブルグ府に於て舉行セリ今其略報を聞くに諸學科を分ちて數學天文測地部、物理部、氣象部、化學部、藥劑部、礦物部、地理部、人類部、植物部、動物及比較解剖部、農學部、獸醫部、解剖及生理部、病理解剖及普通病理部、內科部、外科部、婦人科部、小兒科部、眼科部、精神病及神經病部、耳病部、咽喉部及鼻病部、普通衛生部、軍人衛生部の二十四部と云初日及び最後日に總集會中三日を以て部會を開き總集會に於てハ東京大學の教師タリシブラウンス氏蝦夷島及其住民、フェイスン氏北獨逸平地穿鑿、キルヒホフ氏ダーウ井ニスムスの説、ロルフス氏獨逸と亞弗利加の關係、シワルツ氏衛生學の實地治療術に於ける關係等の講談ありて頗る盛會なりし由又廿一日は日曜且市中の大祭日ヨ當りて學術會を實施し難きを以てハルツ山に遠足し學者社會の一大親睦會を催ふせしと云

(簡單なる物理試驗) シヤボン球甲と

乙なる水素を滿てたる瓶中に齎し暫時

にりして取出し燭火を以て之を試むれば忽ち破裂す是れ



水素ハシヤボン皮と透して滲入するハ證なり

(光の波動説と駁す) 獨逸のケルツ氏は此頃物理上定律

の改革と題する書と著し再ひ光の發出説を採用すへきを

を揚言し且つ波動説に鉾盾の角少なからざるを證して

曰く見よ此證を見よ大なる哉物理學者の守舊心たるや二

説の黑白を決する果して何れの時にあるやと(ウヰテマン

氏理化新聞)

○地震に關したる注意 或る地震學者の話に東京にてハ

地震の方向大抵東或は西なると以て長き家屋ハ之を東西

ハ長く建築し博物館等の物品も其心して之を陳列すべし

又從來の經驗に由れば本所築地等の低地震動を受ると麴

町麻布等の高地よりも甚だしきを以て壯嚴の大廈ハ之を

高地に建築するを良とすと云へり

○かなのくわい 月雪花等此部を解きたる以來かなのく

わいも益々盛大に赴き會員も既に數千人の多きに及びた

れば本月四日夕芝公園紅葉館於て會員の親睦宴會を催

されたり同日は埼玉の暴徒蜂起していまだ間もなきとな

れば參議方には何や彼やのとよて中々御多忙の際にてあ

らせられしならんが其中にて伊藤松方の兩參議は會員の

招に應じて御臨席相成りたるのみならず懇々御高論を賜

はりたれを會員の悦は一方ならざりしと同日會員吉原、

外山、丸山、元田、高崎等諸氏の席上演説ありたる由なり

又文部省御用掛森有禮君にも御臨席相成りたるのみなら

ず會員の求に應じて席上演説をせられたる由なり其演説

中にはかなのくわいを攻撃せられたるも尠なからざり

し其主意たる今日の多く六かき漢字の多くてはなら

ざれハ宜しく我邦にて用ゆる字數を減少せざるべがらず

と云にありたれば森君の説にして行ハれざる位ならばか

なのくわいの説は固より行ひ得べからざるものなり

○羅馬字の會 東京大學の教員學士等の中にはかなのく

わい員たる者も尠なからざるが又漢字に換るに羅馬字と

以てせんを主張せらるる者も夥多あるとなれば此人々

は近き中に羅馬字の會を興さんと相談中なる由なり

雜錄

素徒西洋料理法第五回

汲々夫

第一味

(赤茄子肉羹) 赤茄子一個ヲ湯デ和ゲ皮ヲ剥キ味噌汁ニ

シ



(赤茄子肉羹) 赤茄子二個ヲ湯デ和ゲ皮ヲ剥キ味噌澆ニテ漉シ其露ヲ肉羹一合ト交ゼ胡椒ヲ加ヘ鹽加減ヲ試ミ猶三十分程煮ルヘシ

第二味

(ヲムレット) 玉子ニ鹽、胡椒ヲ交セ合ハセ、牛酪ヲ鍋ニ敷キテ焦ガシ右ノ玉子少許ヲ延ヘ、煮タル肉ノ小切レヲ其上ニ並ヘ玉子ニテ卷キツ、焼キ之ヲ取り出シ又更ニ右ノ如ク玉子ヲ敷キ其表面ノ未タ熟焦セザル時前ノ卷玉子ヲ卷キ込ムナリ、斯ノ如クスルコ三四回ニ及ベバヲムレットヲ得○又葱等ヲ加フルモヨシ

第三味

(ヒレ—肉) ヒレ—肉ノ大ナル切レヲ善ク洗ヒ、鹽ヲ塗リ、牛酪ニテ焦ゲル迄焼キ、肉ノ半分隠レル位ニ湯ヲ入レ蓋ヲ爲シ弱火ニテ一時間煮ルヘシ  
(玉葱) 上皮ノ茶色ナル處ヲ剥キテ湯デ箸ヲ刺シテ容易ク貫ル様ニナリタル時取り出シ、牛酪ニテ煮轉バシ、鹽胡椒ニテ味ヲ付ケ、肉羹ヲサシ、弱火ニテ數十分間煮ルヘシ  
○又湯デタル儘牛酪汁ヲ注テ食スルモヨシ其製法左ノ如

シ  
(牛酪汁) 牛酪二杯ヲ熔カシ之ニ温飽粉三杯ヲ攪キ交ゼベシ○此汁ハ他ノ野菜類ニ用ヒテ可ナリ又蓄ヘ置クコトヲ得

第四味

(鳥飯) 鳥ノ身ノ長キ處ヲ長ナリニ切り、細カク刻ミタル葱ヲ加ハヘ殘肉ト一處ニ牛酪ニテ十分間攪キ廻シツ、煮、鹽加減ヲ見、良肉ヲ取り出タシ、餘物ニ湯ヲ入レ二時間計リ弱火ニテ煮出シ、水囊ニテ漉シ、其露ヲサマシ、良肉及ヒ米ヲ鍋ニ入レ、右ノ露ニテ並ノ飯ヲ炊ク通りニ煮ルヘシ○又サフランヲ水ニ和シタル黄色ノ液ヲ交ヘ炊グモヨシ

(赤茄子サラダ) 赤茄子ヲ薄ク切り並ノサラダノ如ク鹽、胡椒、油等ヲ以テ製スヘシ○他ノサラダノ菜類ニ混スルモヨシ

後口

(練牛酪) 牛酪一杯、砂糖三杯ヲ瀬戸物ニ入レ善ク搗キ交ゼ、湯デ玉子ノ黄身二個ヲレモン或ハ檸檬ノ露ト善キ

れば參議方には何や彼やのよて中々御多忙の際にて

第一味



程ニ調和シ、右ヲ一處ニ練リ合ハセヘシ○カステラノ如キ菓子ニ付ケテ食スレハ美味ナリ (晚餐終)

井上哲次郎氏來翰ノ大意

以下ニ掲載スルハ、同氏ヨリ三四回ノ來翰中、其大要ヲ拔萃セルモノナレハ、語意或ハ連續セサルモアルベシ、氏ハ四月三日伯林府ニ着、八月三日「ハイデルベルヒ」府ニ移リ、現ニ該府ニ在留セラル、航海ノ途上ニ於テハ、記スヘキ話頭ナキニ非スト雖也、前途氣力ヲ要スルノ事業アルコト故、無用ノ事ニ勞力ヲ費スベカラズト思ヒ、詩モ作ラズ、亦紀行ヲモ綴ラズ、此等ノ談ハ、歸朝ノ後ニ讓ル事トセリ、香港柴棍兩地、我邦ノ良民至テ少ナクシテ、賣淫婦ノ割合ニ多キハ、外國ニ對シテ愧ツヘキコトナリ、新嘉坡以西ニハ、復邦民ヲ見ス、馬耳塞港ヨリ巴里ヲ經テ、鐵路數百里、伯林ニ到ル、其間山野ノ風景、概子天然ノ趣致ニ乏シ、唯其人工ノ遍ク到レルハ、洵ニ驚クヘシ、巴里府ノ如キ、其外宏麗雄偉、以テ文明ヲ表象スルニ足レリト雖也、其内部猥淫褻、殆ント言フニ忍ヒ

サルモノアリ、演劇ハ婦人殆ント全身ヲ裸セルモノ、踏舞ニ成リ、「ルーブル」等ニ往テ見ルニ、珍奇ノ物ヲ蒐集セルコト到レリト雖也、所謂名画ナルモノハ、裸体ノ美人ヲ画ケルモノ多シ、美術ニシテ觀者ノ心ヲ高尙ナラシムルニ足ラザル此ノ如シ、其他識ルヘキナリ

伯林府ハ、氣候極メテ惡ク、塵埃充滿シテ、大氣清淨ヲ欠キ、書窓ヲ開テ月ヲ望ムニ、天一雲ナキニ、猶朦朧トシテ清輝ヲ放ツ能ハザルヲ見ルモノ數々ナリ、若シ半日モ運動セズシテ家居スルハ、四方ヨリ空氣ノ壓シ來ルカ如キ感覺ヲ生ズ、冬時ハ、室ノ内外、溫度ノ差甚シク、窓ハ大抵二重ノ玻璃ニ成リ、外氣ヲ通セス、燈火煖爐ト、人ノ呼吸ト、以テ炭酸ヲ製出シ、尿管亦臭氣ヲ放ツヲ以テ、室内空氣ノ腐敗實ニ甚シ我邦人ノ如キハ、必ス巨室ヲ僦テ之ニ居ルヲ要ス、小室ニ蟄在シ運動ヲ怠ル等ハ、一般患肺ノ源因タリ、理髮床ニ至ルモ、絶テ鼻毛ヲ剃去スル者ナク、髭モ亦獨リ裝飾ノ爲メニ之ヲ存スルニ非ス、皆以テ呼吸ヲ保護スヘキ爲ニ之ヲ存スルナリ、當府ハ又用水惡シク、加フルニ寒氣嚴シキ故、住民皆多ク麥酒ヲ飲用ス、其品位精

長ニシテ、其價格亦廉ナリ、適宜ニ之ヲ用井レハ、健康ニ

人ニ早川某、海軍ノ人ニ山内某アリ、秋元、土方、長松、郎、



長ニシテ、其價格亦廉ナリ、適宜ニ之ヲ用井レハ、健康ニ益アレド、獨逸人之ヲ用フルノ多量ナルハ、驚クヘキ程ナリ、然レド當地ニ住スルモノハ、一般ニ強健ニシテ、其一例ヲ舉グレバ、夏天ニテモ、日傘ヲ携フルモノハ、老人ト婦女ノミナリ、當府ノ風ハ、質朴ニシテ、婦人ナドモ嘗テ巴里ニ於ケルガ如キ艷美艷裝ノモノヲ見ズ、唯其白皙ニシテ長頤、壯健ニシテ亦智識アル容貌ヲ具フルハ、日本婦人ノ無キ所ナリ、其常ニ外出遊歩スルハ亦美風ノ一ト謂フベキモノナレド、往々街頭ニ行々物ヲ食フモノアルハ、視ルニ忍ヒザルヲナリ、家族ノ状態ハ、極メテ善ク、一家團欒、渾々和樂ノ意アリ、絶テ家翁ノ權盛ニシテ、家屬皆屏息スルガ如キ弊ナシ、當地ニテハ又犬ヲ使用シテ荷車ヲ曳カシム、智ニシテ膂力アリ、我邦人力車夫ノ或ハ慙色アルヲ覺フ、

伯林ニハ、日本留學生多ク、末岡精一、都築馨六、木場貞長、藤澤利喜太郎、中澤岩太、和田維四郎、樫村清徳等諸氏ハ、皆東京大學ヨリ來リシ人々ナリ、其他留學生ニ、佐藤、佐々木、三浦、宮本、青山、加藤、木越等諸氏アリ、陸軍ノ

人ニ早川某、海軍ノ人ニ山内某アリ、秋元、土方、長松、郷、戸田、本多、松方等諸縉紳ノ子弟モ當府ニ在リ

伯林大學ハ、獨逸諸大學中ノ最ナルモノニテ、試験モ頗ル高尚ナリ、哲學教授ニハ、「ケエレル」、「ミセレット」等諸大家アリ、大學ノ前ニ「ウヰルヘルム、フォン、フムボルト」、「アレキサンダー、フォン、フムボルト」兄弟二氏ノ像アリ、大學ノ後ニハ「ヘーゲル、プラッツトイヘル廣小路アリテ、茲ニ「ヘーゲル」氏ノ像アリ容貌嚴肅ニシテ稍枯瘦セリ、「ギエーテ」、「シレル」等諸氏ノ像モ、伯林府内ニアリ、「ガント」氏ノ像ハ、「ケエニグスベルヒ」ニ在リ、一千八百六十四年、「ラウヒ」氏カ黃銅ヲ以テ作りシモノニテ、氏カ三十歳ノ時ノ眞ヲ摸セルモノナリ、蓋シ海外諸邦ニ在テハ、學者文人ト政治家トニ論ナク、自國ノ先輩ヲ尊崇スルノ風大ニ行ハレ、或ハ其像ヲ作テ通衢又ハ公園ニ建テ、或ハ其人ノ名ヲ取テ、橋梁街市ニ命ズ、以テ其圖ノ光榮ヲ添ヘ、又以テ後輩ノ心ヲ勵マス、美風ト謂フヘシ、我邦ノ人、或ハ漫ニ漢土人ヲ尊ヒ、或ハ妄ニ歐米人ヲ崇ムルカ如キ、之ヲ視テ少シク反省スル所アルベシ



伯林府ニ「パノプチコム」ト云ヒテ、蠟人形ノ見セ物アリ、一日往テ之ヲ見、大ニ愉快ヲ感セリ、就中「ソクラテース」氏ガ狀貌肥大、死ニ臨ミ從容椅子ニ倚レル、「カント」氏ガ瘦顔短頸、杖ト帽トヲ携テ立テル、拿破侖一世ノ腕ヲ組テ思フ所アルカ如キ、「ダーウヰル」氏ノ顔面不思議ニモ猿猴ニ類スルガ如キ、或ハ老鍊ノ思想ヲ表象シ、或ハ沈勇ノ精神ヲ望見スヘク皆最モ感動ヲ與ヘタリ、其他「フリードリヒ」大王「ガムベッタ」、「グレゲヤ」、「ピスマルク」等諸豪、及ビ「レツシング」、「シレル」、「ギエーテ」、「フムボルト」、「ゲオルテール」諸學士ノ像アリ、一々眞ニ逼ラサルナク、之ニ對セルノ間、人ヲシテ古聖賢俊傑ヲ一室ニ會スルカ如キ想アラシメ、躊躇遽ニ去ル能ハザリキ、八月三日ヨリ「ハイデルベルヒ府」ニ移レリ、當府ノ大學ニテハ「ニコラーノ」、「フヒッセル」氏、哲學ノ教授タリ、冬學期ヨリ就テ講義ヲ聽ク積ナリ、目下當府ニアル日本書生ハ、郷誠之介、斯波淳六郎、高橋茂、姉小路公義、及匹田某、余ト共ニ六人ノミ、獨逸ニ着セシ以來、身體健康ニシテ頃日ハ獨逸語モ談話

誦記共ニ差支ナキニ至リシ故、益平生ノ志氣ヲ鼓舞シ、切磋致シ居レリ、僅々三年ノ間ニ、幾許ノ進歩ヲ見ルコト能ハサルヘキコナルヘケレト、將來東洋ニテ學問ヲ振起スヘキ基礎ヲ得タシト存シ、一意奮勵罷在候、伯林ニ在リシ日一吟アリ拙陋甚タシト雖ト、亦以テ實情ヲ見ルニ足ルヘシ、  
學業從來期大成、飄蓬萬里客心驚、壯志不知何日遂、酸風苦雨伯林城、  
(畢)

學會記事

○東京化學會記事 明治十七年十月十八日午後二時ヨリ例場ニ會ス「農商務省工務局ヨリ同局月報第二十七號ヲ工學會ヨリ工學會誌第三十三卷ヲ東京學士會院ヨリ同院雜誌第六篇ノ四ヲ本會ヘ寄贈セラレタリ」客月會員吉田彦六郎氏及松本收氏ノ紹介ヲ以テ本會ヘ入會ヲ申込レタル中村政儀氏ハ本日出席正員ノ投票ヲ以テ入會ヲ許サレタリ「次會ヨリ出席會員ノ姓名ヲ記事ニ登載スルコト決ス」清水鉄吉氏硫化「カルシウム」ノ説ヲ述ブ吉田彦六郎氏ハ嘗テ發光粉ヲ分析シ其百分中「カルシウム」五五、六



○硫黃二二、二二酸素ニ二、一八ヲ得タリト又之ヲ計算ス  
 ンバ  $Ca_2SO_2$  ニ符合スト云ヘリ次ニ久原躬弦氏鹽化「フタ  
 ール」酸基構造ノ説ヲ述ブ「本日出席會員二十一名ナリ  
 (東京數學物理學會) 十一月八日午後一時半例場ニ會  
 ス」難波君前會ノ記事及ヒ數學譯語會記事ヲ朗讀ス「理學  
 協會ヨリ同雜誌第九卷ヲ東京大學ヨリ學藝志林第八十七  
 冊ヲ寄贈アリタリ」川北氏文部省ヨリ今回米國ニウラル  
 レアン博覽會ニ東京數學雜誌ヲ出品スル爲メ同雜誌ヲ本  
 會ニ請求アリシニ付第一號ヨリ五號迄五部ヲ同省ニ寄付

套言譯語

英  
 Objective  
 Eye-piece  
 Magnifying power  
 Focal distance  
 Wave  
 Undulation  
 Longitudinal W.  
 Transversal W.

佛  
 Objectif  
 Oculaire  
 Grossissement  
 Distance focale  
 Onde  
 Ondulation  
 O. Longitudinale  
 O. transversale

獨  
 Objectiv  
 Ocular  
 Vergrößerung  
 Brennweite  
 Welle  
 Wellenbewegung  
 Longitudinale W.  
 Transversale W.

對物レンズ  
 接眼レンズ  
 倍率  
 焼点距離  
 波  
 波動  
 縱波  
 橫波

セシ旨報告「北尾君ハるいこすこふヲ三輪君は(○)十セ  
 (1)  $a + \frac{a}{2} + \frac{a}{4} + \dots + \frac{a}{2^n} + \dots$  (2)  $x^2 + \dots + x^n + \dots$  ノ總和法ヲ櫻井君ハメン  
 デルエフ氏周期定律ノ概略ヲ述ヘラレタリ」櫻井君ハ右  
 演述ノ終リニメンデルエフ氏周期定律ノ如キハ化學家ノ  
 爲メニ非常ノ益ヲ與ヘタルナレトモ其意味ニ至リテハ數學  
 物理上ノ研究ヲ積ムニアラサレハ解スル能ハサル者ナル  
 ヘシ余ハ化學後來ノ進歩ハ全ク數學及ヒ物理ノ進歩如何  
 ニ關スト信ス是レ余ノ化學家ニシテ數學物理學會ノ會員  
 タルヲ願フ所以ナリト述ヘラレタリ



Wave-front	Front d'onde	Wellenfrant	波ノ前面
Wave length	Longeur d'onde	Wellenlänge	波ノ長サ
Phase	Phase	Phase	位相
Amplitude	Amplitude	Amplitunde	振幅
Interference	Interference	Interferenz	交錯
Ether	Ether	Ether	エーテル
Double refraction	Double refraction	Doppelbrechung	複屈折
Ordinary ray	Rayon ordinaire	Ordinärer Strahl	常光線
Extraordinary ray	Rayon extraordinaire	Extraordinäre S.	非常光線
Period	Période	Dauer	周期
Polarization (light)	Polarisation (lumière)	Polarization (licht)	偏 <small>カタヨリ</small>
Plane P.	P. plane	Geradlinige P.	直線偏
Circular P.	P. circulaire	Kreisförmige P.	圓狀偏
Elliptic P.	P. elliptique	Elliptische P.	楕圓偏
Chromatic P.	P. chromatique	Chromatische P.	現色偏
Rotatory P.	P. rotatoire	Circularpolarization	回轉偏
Polariscope	Polariscope	Polariskop	偏光器
Polarizer	Polariseur	Polariseur	起偏器
Analyzer	Analyseur	Analyseur	驗偏器
Stereoscope	Stéréoscope	Stereoskop	實體眼鏡
Diffraction	Diffraction	Biegung	枉廻
Fringe	Fringe	Interferenz	縞廻
Diffraction grating	Reseau	Gitter	枉廻格子
Sound	Son	Schall	音